作品番号：1

The Third Place
～心と身体をととのえる図書館ホテル～

活水女子大学 健康生活学部 生活デザイン学科 3 年
岸川　くるみ
溝上　真唯
谷川　彩葉

本提案は、自然の時間を感じながら心身を整える宿泊型図書館である。屋内と屋外の間に半屋外の Third Place を設け、光・風・熱・音・香りといった自然現象を身近に感じられる環境をつくった。さらに、円状に配置した縦ルーバーによって生まれる日陰を時間の指標とし、一日の変化を建築そのもので可視化する。宿泊によって自然の移ろいを一日を通して体験し、利用者を自然本来のリズムへと導く。

The Third Place ～心と身体をととのえる図書館ホテル～

現代の都市がもつ加速した時間は、自然や宇宙が本来刻む時間の流れとは異なる。私たちはその速い時間の中で生きているが、時には自然本来のリズムに身を委ね、心身を"ととのえる"場が必要である。本提案は、自然の時間に再接続し、心と身体を回復させる宿泊型図書館である。半屋外の環境で、光・風・熱・音・香りの移ろいを感じながら滞在することで、利用者はゆるやかな本来の時間へと調律されていく。

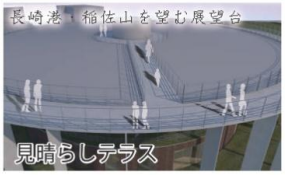


敷地外周部に森をつくり適度に現代社会と遮断。落葉樹や季節の花で年間の時の流れを感じられる。

敷地は長崎市中心部にあり、周囲はオフィス街。現代社会の加速した時間の中で生きている人が多いエリアである。

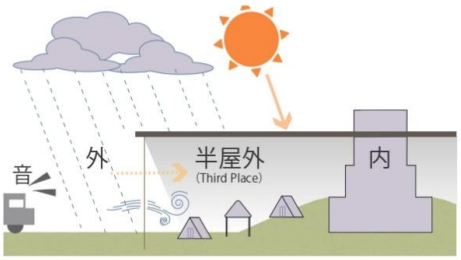






外でも内でもない Third Place

屋外はうるさい・暑い・雨に濡れるといった自然の影響をうけ、室内では自然を感じにくい。そこで、**自然を感じながらも快適に過ごせる半屋外空間 (Third Place)** を形成する。

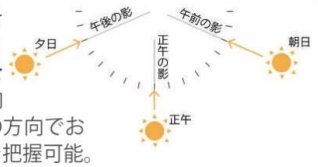


なぜ宿泊型図書館なのか？

図書館は**静かな空間**である。静かな空間で過ごす時間は、私たちの感覚を研ぎ澄まし、宇宙・自然がもつ微細な変化を受け取る力を高めてくれる。さらに、光・風・温度の移ろいを**一日の中で連続的に体験できる**よう、本提案では"宿泊型"の図書館を計画した。

時の流れ・自然の変化の可視化

縦ルーバーを円状に配置し**1日の時の流れを可視化**。施設内の人々は日陰の方向でおおよその時間を把握可能。

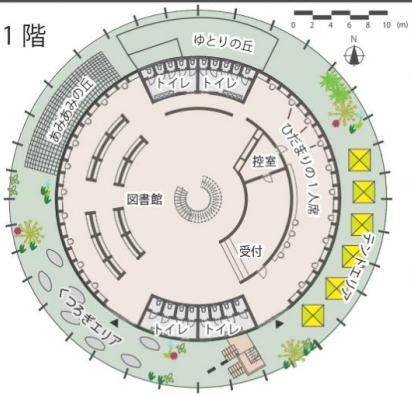


縦ルーバーの環を**半透明のテント屋根**で覆うことで、屋外の明るさの変化をやわらかく感じることのできる半屋外空間を形成する。

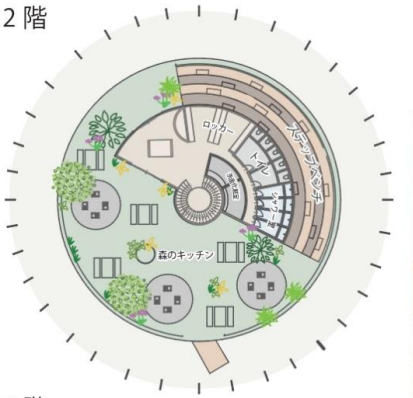


平面計画　- 自然・宇宙を感じる多様な半屋外空間 -

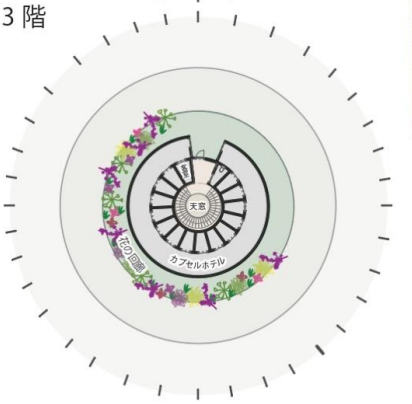
1階



2階



3階

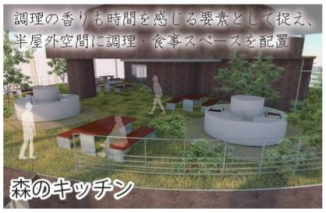


屋内図書館で借りた本を**多様な半屋外空間へと持ち出し、本の世界と自然・宇宙に没入**していく。書籍は屋内で適切保管し、室内にも閲覧スペースを設置。悪天候時も安心して過ごせる**屋内空間を確保することで、心を落ち着けながら半屋外で過ごすことができる**。

半屋外に設置したテントで就寝する形式とし、ホテルでもキャンプでもない**"第 3 の宿泊体験"**を提供。室内カプセルホテルも併設し、悪天候時にはそちらを選択可能とした。**安心できる屋内の選択肢を用意することで、半屋外で自然・宇宙と無理なく向き合える。**









作品番号：4

制御不能な地層のうえで暮らす サーバーの熱を都市と身体へと循環させる、人新世の環境建築

東京都市大学大学院 総合理工研究科 建築・都市デザイン専攻
建築学領域　1 年
沼野　仁哉

人々は、太陽や月、潮汐や季節の変化を身体で読み取り自然と生活をしていた。本提案では、現代の情報社会を支えるデータセンターを人新世における新しい自然として捉える。情報処理によって生まれる廃熱を温水として回収し、温泉や隣接テナントの空調・給湯設備へ循環させる。情報から生まれた熱に触れることで、人工物が環境条件となる時代を可視化し、失われつつある身体と環境、宇宙との接続の関係を再構築する建築を提案する。

制御不能な地層のうえで暮らす

サーバーの熱を都市と身体へと循環させる、人新世の環境建築



01.概要

本提案は、データセンターのサーバーを単なる情報処理装置ではなく、熱を発し、水を温め、都市の環境条件をつくり出す「新しい自然」として捉える建築である。

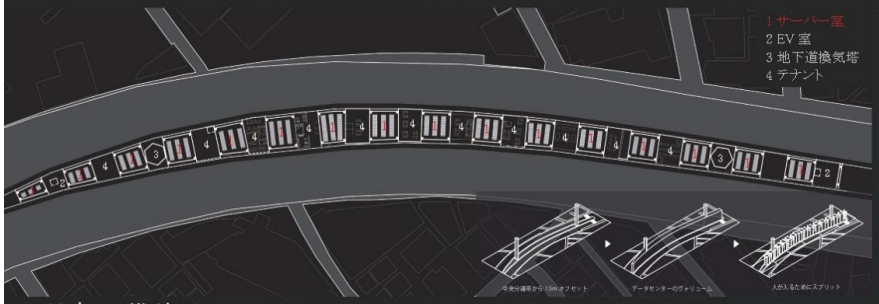
02.現状の問題

AIをはじめとする情報インフラの普及に伴い、郊外を中心に建てられてきた。防犯や環境の観点から閉鎖的な外観をもち暮らしへ還元される使われ方はほとんどない。近年では都市部への立地も進みつつあるが、防犯上の観点から所在地は積極的に公開されず、社会のどこに存在しているのか実感しにくい。情報技術が発達している現在において最も身近であり、暮らしから乖離した不可視のインフラの1つがデータセンターである。



03.平面計画

都市の余白としてある、中央分離帯に計画をする。
サーバー室とテナントを交互に配置し、データセンターに人の隙間をつくる。



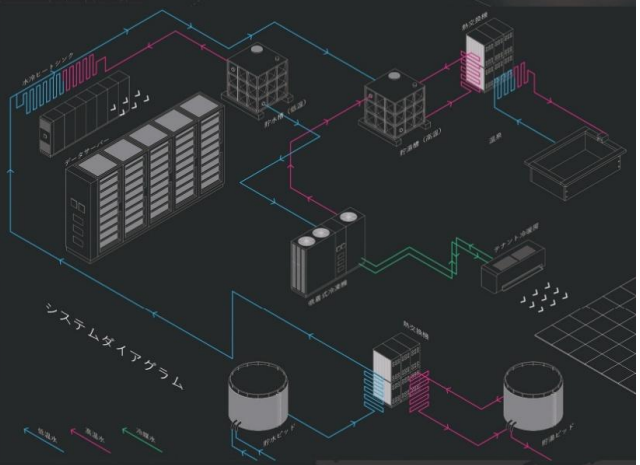
04.環境・設備計画

データセンターから発生する廃熱を温水として回収し、建築内に循環させます。通常であれば外部へ捨てられる熱を、温泉、隣接するテナントの空調、給湯設備へと利用する。情報はサーバーで計算され、計算は熱を生み、その熱は水に移り、水は人の身体や都市の日常を温める。
この建築では、サーバー室は完全に開かれるわけではない。
防犯性や管理性を確保しながら、その周囲に熱を受け取る温泉、テナントを配置する。
人はサーバーそのものに直接触れるのではなく、サーバーが生み出した熱によって温められた水や空気を通して、情報社会における自然の存在を身体的に感じることになる。


花屋 花のための温熱環境


サーバーの熱による温泉


新しい自然としてのサーバールーム



05.断面計画

山手トンネルの地下道路の換気設備と一体化して計画をした。
給気口と排気塔は、既存の位置で発電機を設置しデーターセンターの電力へ
サーバー塔の上部には、サーバーの熱からできた温泉を設置



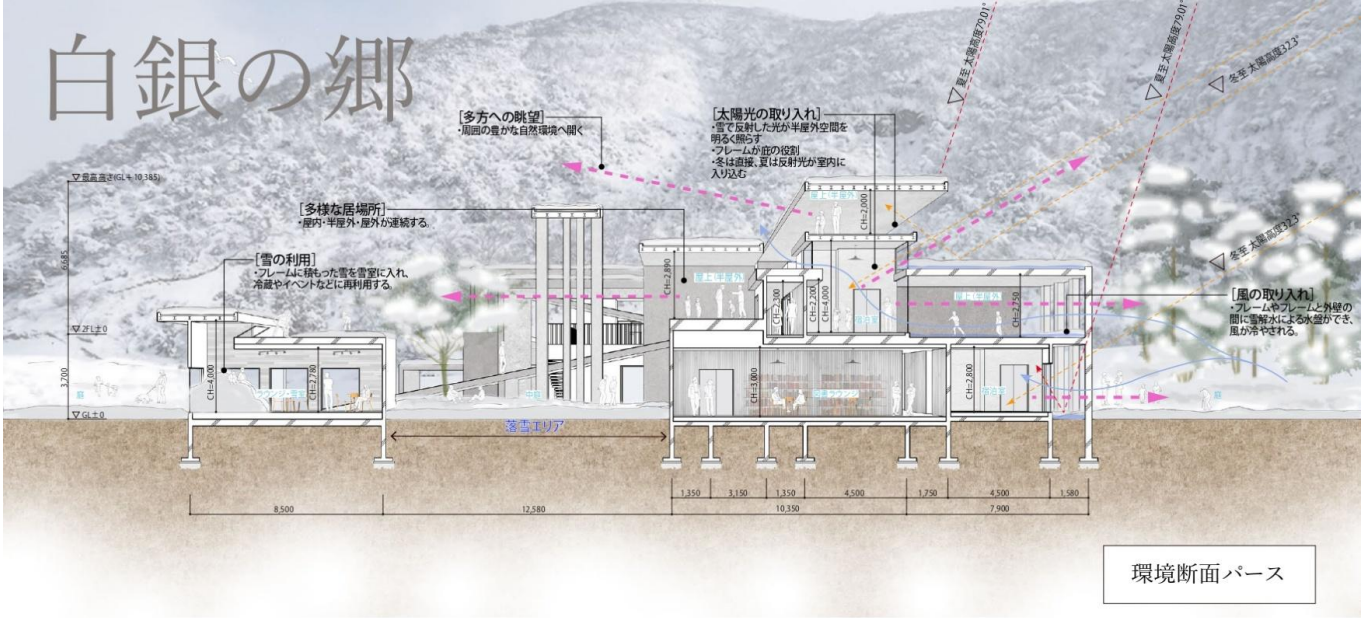
作品番号：5

白銀の郷

神戸大学大学院 工学研究科 建築学専攻 修士 1 年
阿部 稜平
池之内 圭悟
中村 龍二
宮本 泰幸
小澤 俊元

気候変動が深刻な現代の暮らしは、建築がシェルターとして強固になり、人と自然の関係が希薄になった。自然学習の場である林間学校でさえ、建築は内部に閉じ、人々の暮らしは普遍的なハコの中に納まっている。提案では、豪雪地帯である滋賀県高島市箱館山の林間学習施設において、フレーム型の建築を設計し、雪との関わり方を多様化させる。そして、自然を通年活用し、暮らしを豊かにする、“その土地ならでは“の建築を設計した。

白銀の郷



環境断面パース

01. 背景

■ 現代の自然との交信

かつて人々は、自然の壮大さを受け入れ、季節や気候の変化を活かしながら生活していた。ゆえに建築も、その土地に馴染ませ土着的に発展してきた。
しかし今日では、自然に抗い建築を閉じることで四季の移ろいに対応している。自然や宇宙の恵みであった雨や雪は、避けられるべき対象と成った。

02. 敷地　滋賀県高島市

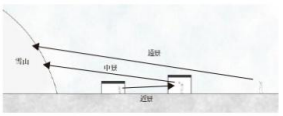
■ 林間学校　もくもくの里



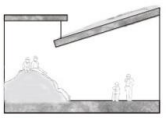
滋賀県高島市箱館山の内部に位置する大阪府吹田市の保有する保養施設。吹田市の小学生が年間を通じて宿泊研修（林間学校）として訪れ、自然学習を行う。
この地域は冬には50cm ～ 1m ほどの雪が積もる豪雪地帯であり、垂直積雪量の指定は150cmとなっている。

03. ダイアグラム

■ フレーム



フレームによって雪という自然現象を、建築内外に多様な境界を設け、自然と人の関係にバリエーションを生む装置へと変換する



傾斜フレームで雪を落とし、雪室で貯雪する



雪が近景・遠景をぼかし、人との関わりや雪の景を強調



屋根や通路に雪が積もり、より近い距離で雪と触れる



冬に溜まった雪が夏に雪室として利用される

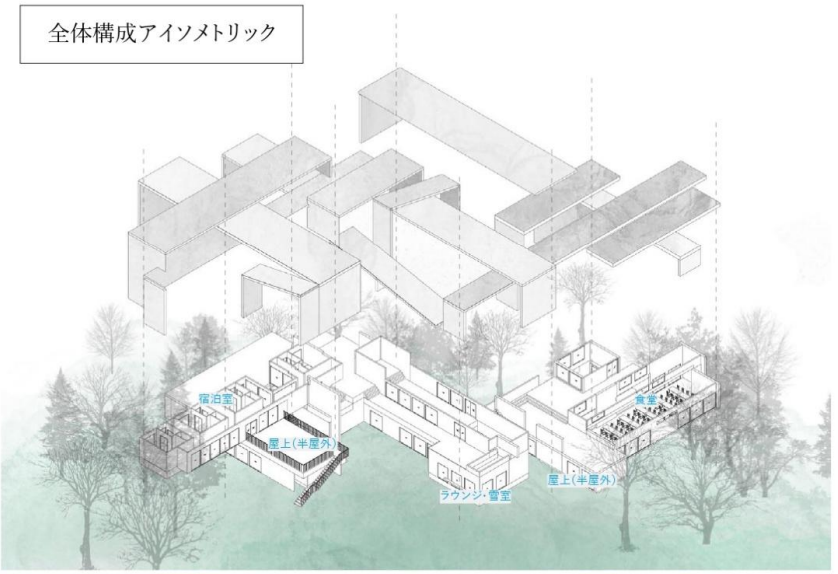


夏には強く遠景や近景への視線が通る

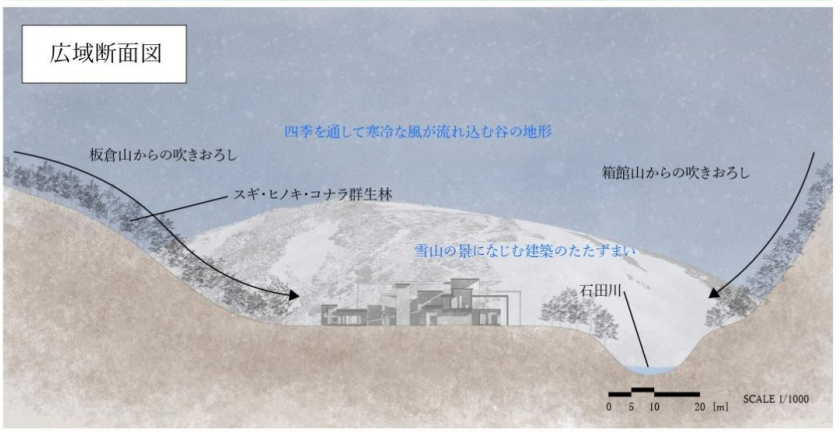


冬には近景・遠景がぼかされ、より雪への視線や抜けた先の景が強調される

全体構成アイソメトリック



広域断面図



作品番号：7

微生物的都市

神戸大学大学院 工学研究科 建築学専攻 修士 1 年
森田 雅都
宮川 湧雲
福山 颯汰

都市の緑は、眺める対象となり、人が自然の循環に触れる機会は失われつつある。本提案では、都市で捨てられる落ち葉を集め、人の手で攪拌し、時間をかけて腐葉土へと還す「土をつくる建築」を提案する。温度や湿度、匂い、季節によって変化する落ち葉に触れる行為を通して、自然の微細な変化を身体で読み取る。花時計を、人と自然が再び交信する場所へと更新する。

微生物的都市



問題提起

現在の都市緑化は、壁面に緑を取り付けることや高層建築の低層部に集約的に木々を集めることが多く、そのどれもが表面的に自然を取り入れることにとどまっている。また、その緑化は多くの資金やエネルギーが費やされ維持されており、そのコストに見合う結果が得られているとは言い難い。さらに、都市の街路樹の枝や落ち葉はそのほとんどが可燃ごみとして処理されており、その存在は見えないものとなっている。ただ眺めるだけで人がかかわることのない緑はバイオフィリックとはかけ離れた位置に存在すると考えられる。



敷地　神戸市花時計周辺

花時計は、神戸市役所・東遊園地・旧居留地に近く、三宮駅からウォーターフロントへ向かう都市軸上に位置する。都心の中で緑や花に触れ、待ち合わせや休憩ができる場所であり、長年神戸市民に親しまれてきた街の象徴でもある。



提案

そこで、都心の中で土を作り出す建築を提案する。落ち葉を腐葉土にするプロセスは人のかかわりが必要不可欠である。そのプロセスを通じて現代の人々が忘れかけている自然との触れ合いを取り戻す機会を提供する。











作品番号：10

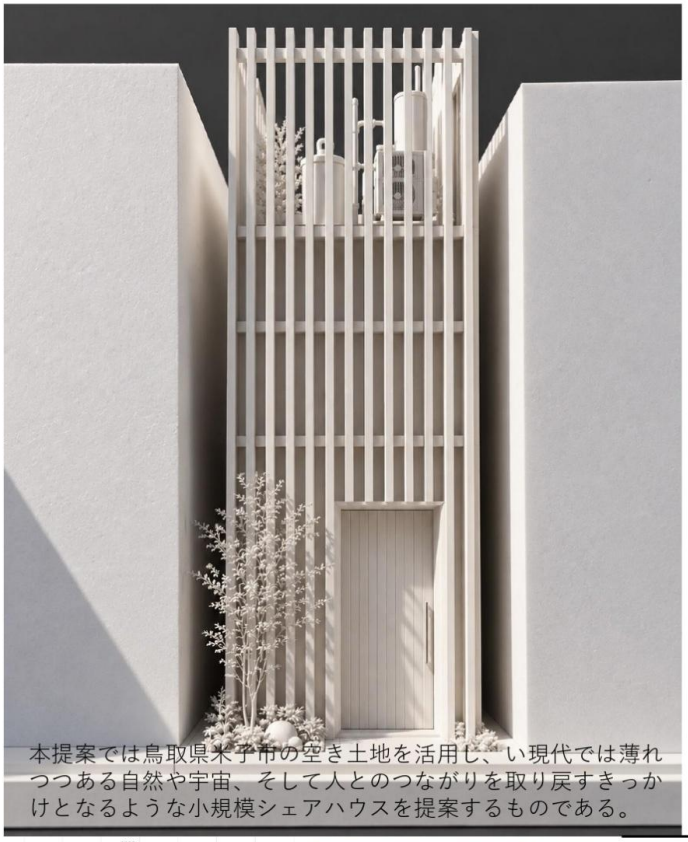
再始
～次元の境界を再構築する～

米子工業高等専門学校 総合工学科 4 年
實近　はるの
仲西　涼
江崎　瑶介
寺﨑　想
高梨　義悠

鳥取県米子市立町二丁目の空き土地に、学生 4 人が暮らす小規模シェアハウスを提案する。かつて商都として栄えた町屋の面影が減少し、高齢化によって建物や暮らしを支える担い手も減る中、若者がかつての暮らしを体験し、次の世代へつなぐ場をつくる。坪庭を介して光・風・音を取り込み、四季の移ろいや人とのつながりを感じる暮らしを実現する。さらに放射空調により、穏やかな室温環境をつくり、自然との関わりを支える。

再始

～次元の境界を再構築する～



本提案では鳥取県米子市の空き土地を活用し、い現代では薄れつつある自然や宇宙、そして人とのつながりを取り戻すきっかけとなるような小規模シェアハウスを提案するものである。

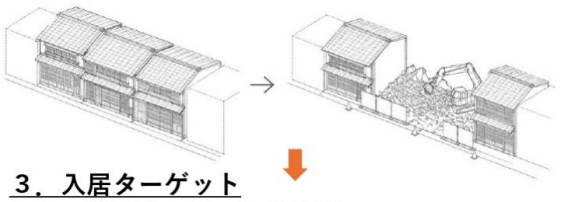
1．対象敷地

鳥取県米子市立町二丁目
かつて「山陰の商都」と呼ばれた町人町。現代でもその面影残る土地。
土地面積　149.09㎡



2．課題

商都であった頃の面影を残ってはいるものの、その数は減少している。また地域の高齢化、管理の難化がみられる。



3．入居ターゲット

かつての暮らしを、次の世代へ

学生4人

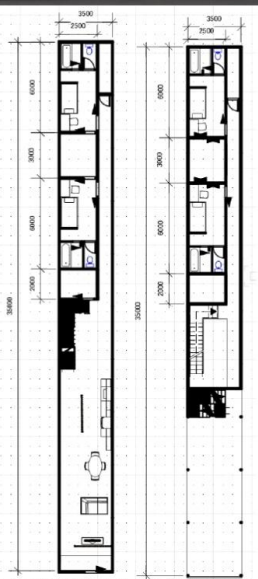
高齢化により、建物や暮らしを支える担い手は減少傾向にある。だからこそ、若者がかつてに近い暮らしを体験し、受け継ぐことが必要だと考える。



4．建物と人と自然のつながり

季節の移ろいを感じる**風**　　時の流れをはかる**光と影**
季節を象徴する**星々**　　夜の静けさを移す**月**
雨の気配を伝える**音**　　木々の成長が刻む**年月**
隣人の暖かさを感じる**庭**　　暮らしの**記憶**

現代では失われつつある、
人や自然や宇宙とのつながりを取り戻す



1階平面

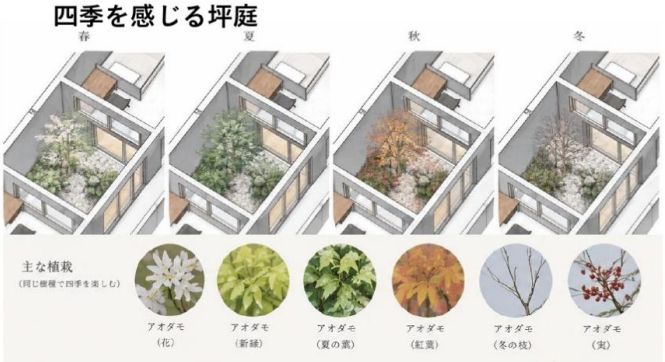
2階平面



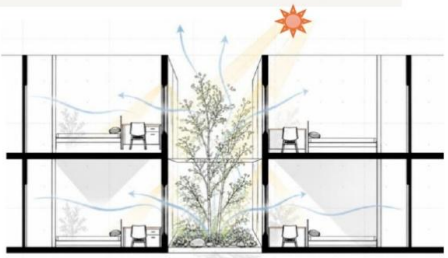
外観イメージ

5．自然と関わる感覚を取り戻す

四季を感じる坪庭



光と風、音を取り込み季節の移ろいを体で感じる。

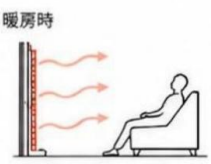


鑑賞だけではなく利用可能な庭にすることで、人とのつながりも促す。



放射空調の効果（イメージ）





壁面からの放射によりドラフト起こさず、穏やかに室温を調節する。
さらに、予想気や気温によって自動調節する機能を持たせることで、季節の移ろいの体感を阻害せず、心地よさをサポートする。

作品番号：11

あいだのメディア

明星大学大学院　建築学研究科　建築学専攻　1 年
石丸　穂高
芳賀　花梨
明星大学 建築学部 建築学科 4 年
佐藤　優斗

従来の壁や天井をカーテンに置き換え、自然と人をゆるやかにつなぐ住まいを提案する。異なる機能を持つカーテンを重ねることで、光・風・音・視線を選択的に調整し、内と外の境界を曖昧にする。9 グリッドを基本とした可変的な空間は、暮らしの変化に柔軟に対応する。時間や季節によって移ろう自然を日常に取り込み、人と環境が呼応する新たな住空間を目指した。

第４回　学生のための環境デザイン設計競技

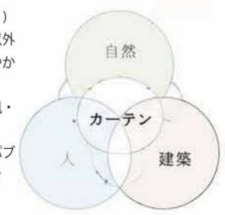
あいだのメディア



カーテンでつくる、新しい壁のかたち。

現代の建築は、箱型の壁によって外の世界を遮断してしまっている。私たちは、壁の役割を「カーテン」に置き換えることで、自然や人の存在を感じながらも、自分の空間をつくることができると考えた。

必要な場所（トイレ、浴室）のみを壁で仕切り、それ以外の空間はカーテンでゆるやかに区切る。
カーテンは、視線・光・風・温度・音などを調整し、内と外、プライベートとパブリック、自然と人をつなぐ媒介となる。



カーテンのバリエーション



防水・遮熱
（夏の強い日射をカット）
（例：遮熱メッシュシート）

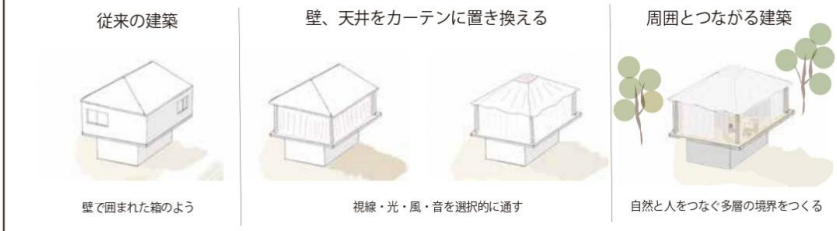


吸音
（室内の反響を抑える）
（例：吸音アコースティックカーテン）

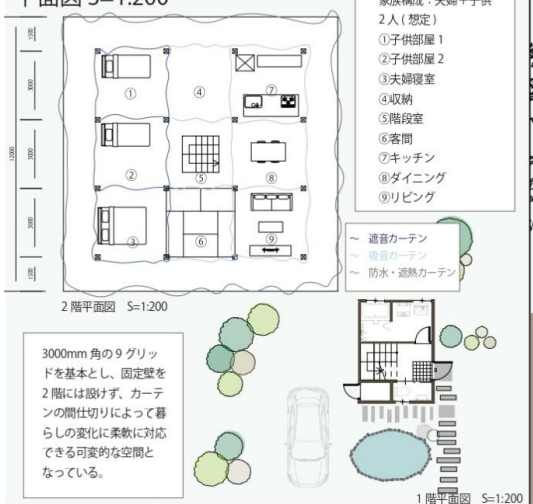


遮音
（外部の騒音を抑える）
（例：多層構造の防音カーテン）

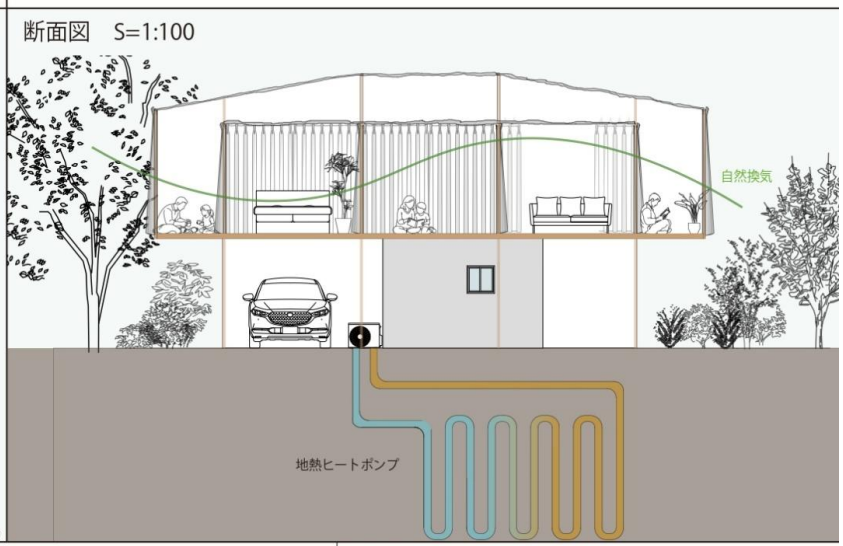
コンセプトダイアグラム



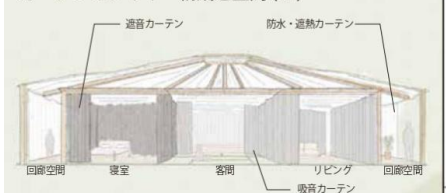
平面図 S=1:200



断面図 S=1:100

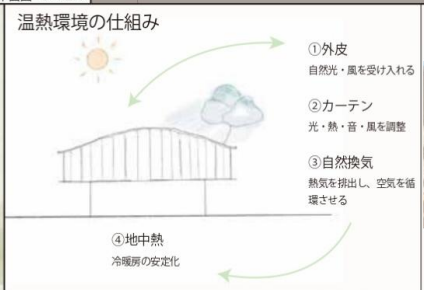


カーテンのレイヤー構成と空間 (2F)



外側のメッシュカーテンは風・鳥の声・街の音を通し、吸音カーテンは室内の反響を抑え、遮音カーテンにより必要な場所だけ閉じる。これにより、室内に音のグラデーションが生まれる。それらを開け閉めすることで異なる空間が交わり、新たな空間へと変化する。カーテンは周囲の環境を調整する「メディア」となる。

温熱環境の仕組み



時間のうつろい



朝
朝日が差し込み、鳥さえずりが聞こえる。

昼
昼下がりの光が、部屋の奥へと溶けていく。

夕方
一日の疲れを癒す、穏やかな夕日。

季節のうつろい



春
麗かな春の日差しが室内にやさしく降り注ぐ。

夏
木漏れ日落ちる夏の日差しと、穏やかな風が室内をめぐる。

秋
黄金色の秋の光が、あたたかい空間を演出する。

冬
澄み切った冬の光が、白いカーテンを透かして床一面に影を描く。

模型写真



作品番号：14

相生（あいおい）

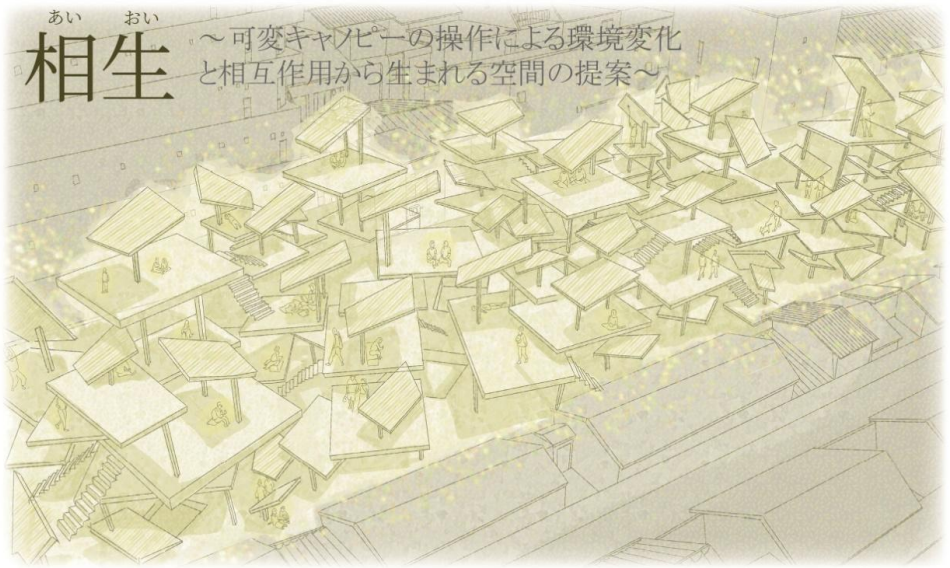
可動キャノピーの操作による環境変化と、相互作用から生まれる空間の提案

東北大学 工学部 建築学科 3 年
Taing Bunlim
神谷 真大

多くの人々が行き交う仙台市のアーケード街。ものが溢れ、情報化が進むこの地で、人々は何を見るのか。駐車場が数多く点在し、滞留空間が不足する仙台駅周辺において、人々が光、風、気温、雨、時間の変化を身体で読み取り、その時々の環境に応じて自らの居場所や過ごし方を変化させていく建築を提案する。可動キャノピーとスキップフロアが生み出す多様な空間は人々の行為によって変化し、重なり合うことで建築全体を構成する。

相生（あいおい）

～可変キャノピーの操作による環境変化と相互作用から生まれる空間の提案～



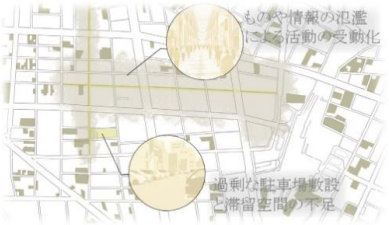
1. アーケードの現状と対象敷地

敷地は宮城県仙台市の仙台駅西側に拡がるアーケードの一角に位置する駐車場である



店舗の老朽化や空き店舗が目立ち、歩行者数も少ない

2. 都市のゆとり・滞留空間の構築



ものや情報の氾濫による活動の受動化

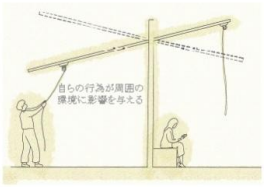
過剰な駐車場敷設と滞留空間の不足

➡ アーケードに隣接する滞留空間の提案

3. 選べる環境、変わる居場所

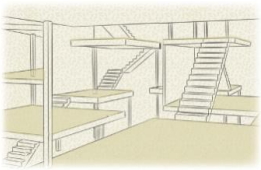
01｜可動キャノピー

壁を貫通するキャノピーを設け、先端部に取り付けワイヤーによって、伸縮・傾斜を操作する。一方のキャノピーを引き出すと、反対側のキャノピーが引き込まれ、隣接する居場所の光、風、雨、開放性が変化する



02｜スキップフロア

ずらし、重ねることで立体的で豊かな空間をつくり出す。これにより光、風、視線、音などの環境が変化し、人々はその時々の身体感覚に応じて、自らの居場所を選択する。異なる高さや距離が生まれることで、多様な過ごし方が広がっていく



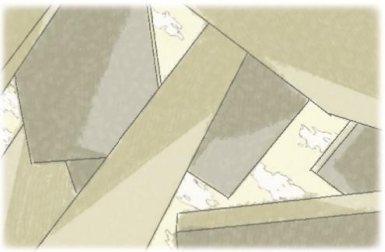
4. 環境応答を促す平面

様々な大きさ・レベルの四角形を重ね合わせて立体空間を構築する。周囲の壁や天井によって切り取られた光、風、雨、温度、時間の変化を身体で知覚し、環境や他者の屋根操作に応じて、自らの居場所や過ごし方を選択する





時間・季節の変化とともに過ごす



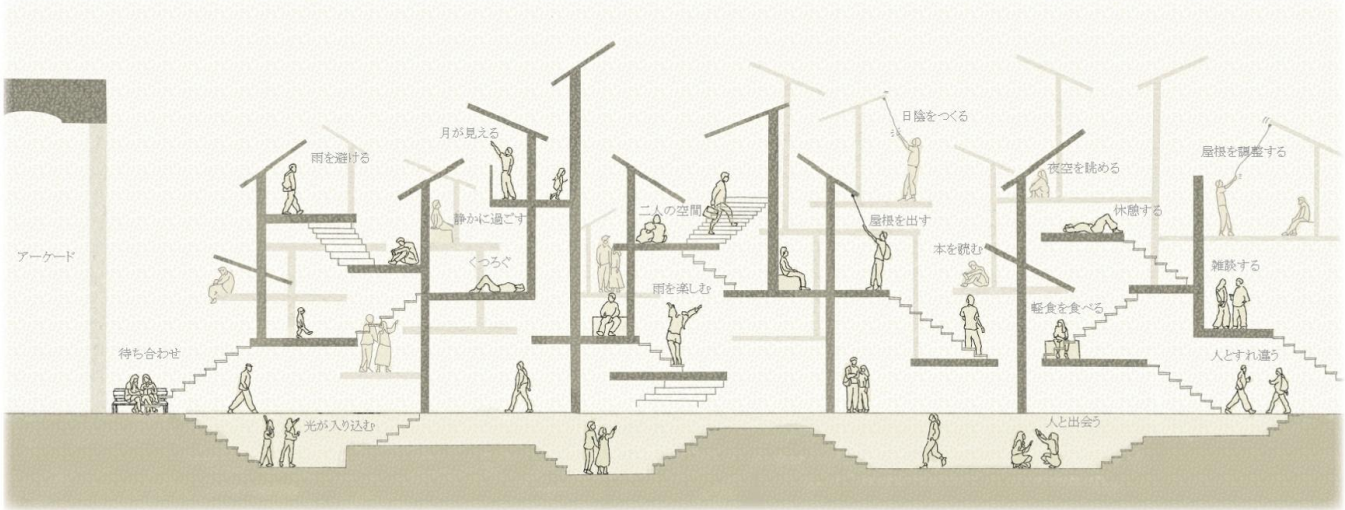
柱や屋根によって空が切り取られる



雨を読み、屋根を操作して適応する



可変キャノピーの操作は連鎖的に人の行為を生み出す。これらが重なり合うことで建築全体を構成する



作品番号：15

窓際で季を編む
～季節に呼応する暮らし～

工学院大学 建築学部 建築学科 ３年
高嶋 郁実
平栗 楓真

自然や宇宙と直接の交信が失われているという課題に対して、窓際に季節に応じた居場所を用意する住宅を提案する。

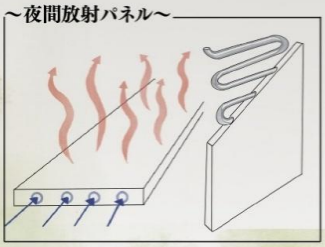
生活動線で自然の変化や太陽・月の運行が目に入り、肌で感じられる工夫をした。季節ごとに環境が心地よい空間を作り出し、それに呼応して居場所を移す。自然の変化を受信して生活スタイルを変えることを交信とみなし、それを促すことを目的とする。都会で生活しながらも自然・宇宙を感じる暮らしを実現させる。

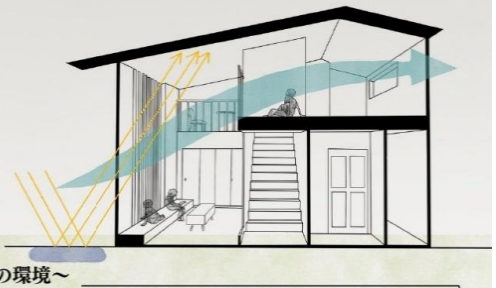
窓際で季(とき)を編む～季節に呼応する暮らし～

高嶋 郁実　平栗 楓真

昔は、自然の変化や太陽や月の運行などの観察から情報を得ていた。宇宙と交信することを通じて、四季を知り、生活の糧を得て環境から身を守って生命をつないできた。一方、情報のあふれた現代においては、直接の交信のほとんどが失われている。
我々はこの課題に対して、窓際に季節に応じた居場所を用意する住宅を提案する。季節ごとに環境が人にとって心地よい空間を作り出し、それに呼応して居場所を移す。生活スタイルを変えることを交信とみなし、それを促すことを目的とする。







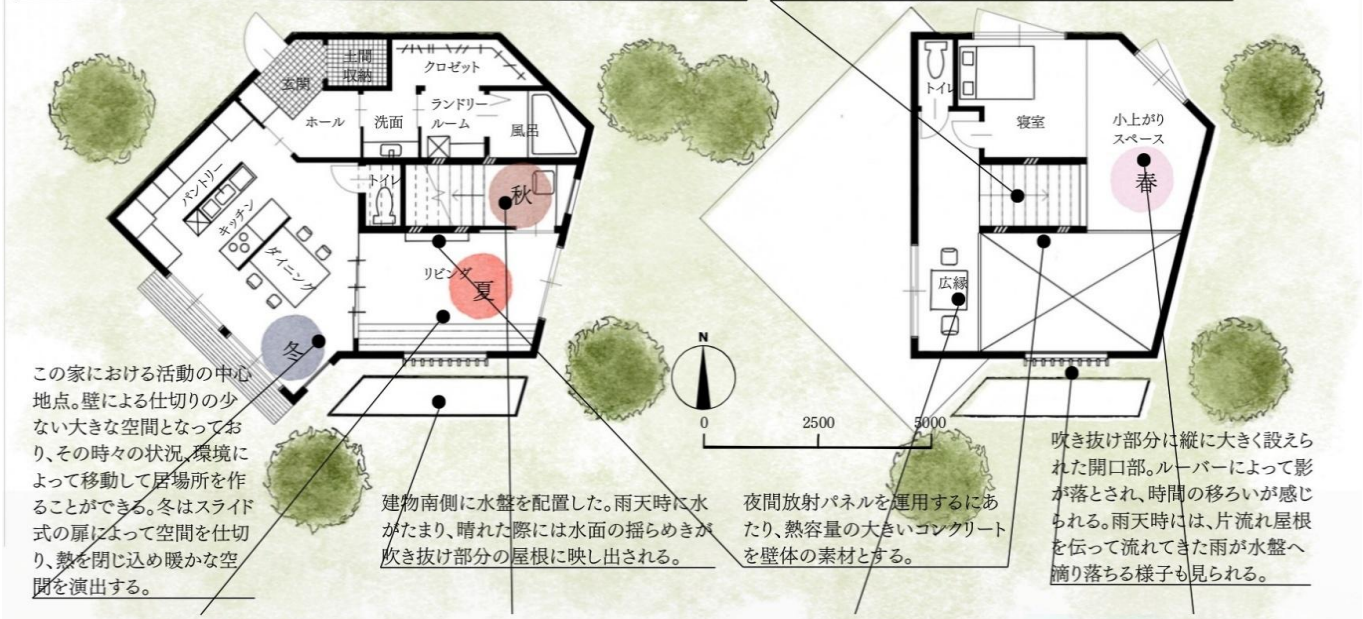
～夜間放射による宇宙との熱交換～

熱を介して宇宙とのつながりを実現するため、我々は「夜間放射パネル」を提案する。
夜間放射パネルとは、夜間に宇宙空間へ熱が逃げる放射冷却を利用し、パネル内の液体を冷やすというものである。冷えた液体が建物の内壁に配管された冷水パイプを流れ、壁を冷却する。温度が下がった壁により、居室を冷やすことができる。そして温度が高くなった液体は再度パネル内部を通り、冷やされてから循環するという仕組みである。屋根にパネルを設置し、階段に接する2枚の内壁に冷水パイプを配管する。また夏だけではなく、冬には昼間に運転し、太陽熱集熱を行う。温められた液体は内壁から部屋を温める。宇宙からエネルギーを受け取ることで、より省エネでより快適な住宅が実現する。

～建築内部の環境～

壁の少ない広い空間は、南北方向の風を受け流し自然換気を促す。南からの日光は、水盤に反射し室内に柔らかく差し込む。夏季は2階を熱的バッファーゾーンと捉え、1階部分に快適な環境を造り出す。

ボリュームの中心に位置する階段。階段上部は天窓になっており、光が降り注ぐ。夜に寝室へ行くために階段を上る際には夜空が広がり、月明かりが差し込む。動線と居場所とを兼ねた空間である。

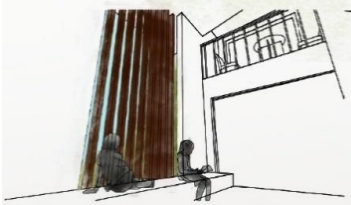


この家における活動の中心地点。壁による仕切りの少ない大きな空間となっており、その時々の状況、環境によって移動して居場所を作ることができる。冬はスライド式の扉によって空間を仕切り、熱を閉じ込め暖かな空間を演出する。

建物南側に水盤を配置した。雨天時に水がたまり、晴れた際には水面の揺らめきが吹き抜け部分の屋根に映し出される。

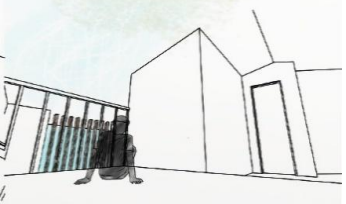
夜間放射パネルを運用するにあたり、熱容量の大きいコンクリートを壁体の素材とする。

吹き抜け部分に縦に大きく設えられた開口部。ルーバーによって影が落とされ、時間の移ろいが感じられる。雨天時には、片流れ屋根を伝って流れてきた雨が水盤へ滴り落ちる様子も見られる。


夏のリビング

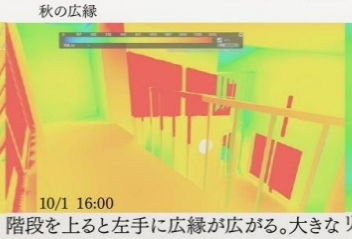

秋の階段


秋の広縁


春の小上がり









窓際に小上がりの台を配置し、ただの開口ではなく、居場所としての窓際を提供する。垂直ルーバーによって直射光を遮り、2階空間がバッファーとなる、居心地の良い涼しげなリビングになるよう設計した。

朝起きて必ず通る階段下に窓を設置。生活動線の中に自然を享受できるように設計した。また、東側を向いた開口からは中秋の名月を望むことができ、静かな空間でしんみりと鑑賞することもできる。

階段を上ると左手に広縁が広がる。大きな開口部と吹き抜けとで挟まれたこの空間は、読書・書斎スペースとして集中できる居場所である。西日でリビングを照らすとともに屋根を流れる雨水を間近で感じる。

リビングと吹き抜けでつながりながらも他の場所よりも照度が低く、リラックスできる秘密基地のような居場所。正面に見える吹き抜け部分の天井には水盤で反射した光が水面を写し、夏が感じられる。

作品番号：16

10 分/3 億 5000 万年
自然の時間に、身体を順応させる建築

山口大学大学院 創成科学研究科 建設環境系専攻 1 年
梅津 歩実
冨田 航成
谷田 みのり
吉松 麗

ショート動画や SNS など、絶えず更新される「速い情報」で溢れる現代社会。その中で我々は、情報の取捨選択に追われ、与えられた情報を受け取ることを当たり前としている。そこで、地球の「遅い情報」を体感できる鍾乳洞に注目し、地上から鍾乳洞へ至る経路の光と温度を段階的に調整し、暗順応と熱順応を促す「人間が地球の本来の姿に寄り添う建築」を提案する。また、順応することで洞内照明を抑え、洞窟本来の生態系を取り戻す。

10分/3.5億万年

自然の時間に身体を順応させる建築

10 MIN / 350 MILLION YEARS



01 | 背景　速い情報に囲まれた現代

現代社会は、絶えず更新される「速い情報」で溢れている。私たちは膨大な情報に囲まれ、いつしか与えられたものを受け取るだけになった。しかし本来、人は自然の変化を身体で感じ、時間や季節を捉えて暮らしてきた。今必要なのは、情報を追うことではなく、自然の中にある「遅い情報」に目を向け、自ら感じ、考えることではないだろうか。



02 | 対象敷地　照明植栽による鍾乳洞内の生態系の危機

対象敷地：山口県美祢市秋芳洞黒谷洞入口

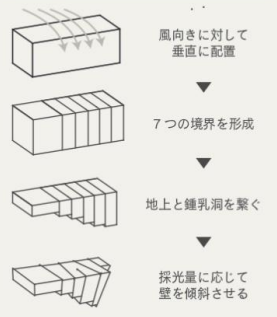
秋芳洞は日本最大級の鍾乳洞であり、数億年という時間をかけて形成された。鍾乳石や地下水によって刻まれた地形を通し、人間の時間感覚をはるかに超えた地球の「遅い情報」を体感できる。その一方、観光のために設置された照明によってコケ類が繁殖し、洞窟本来の生態系に影響を与えているという課題も抱えている。

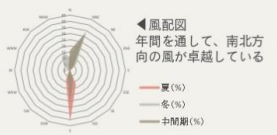


03 | コンセプト　感覚を自然の速度に順応させる

地上から鍾乳洞へ至る経路の光と温度を段階的に調整し、暗順応と熱順応を促すことで、速い時間に慣れた身体を自然の時間へと切り替えていく。環境を変えるのではなく、人間の身体の感覚を自然の速度に順応させるジオミュージアムを提案する。

04 | ダイアグラム　7枚の境界





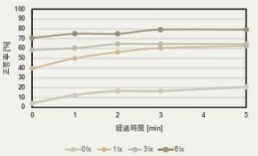
◀風配図
年間を通して、南北方向の風が卓越している

05 | 提案　感覚を自然の速度にするための暗順応と熱順応

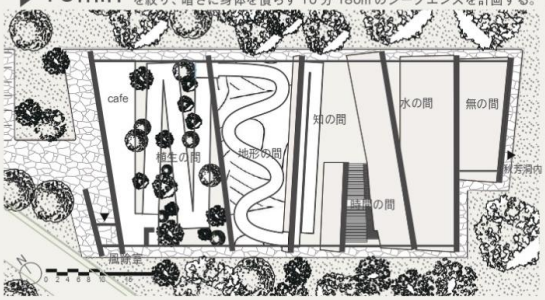
①光に順応する暗順応

実験：
低照度環境における視認性の変化を検証した。

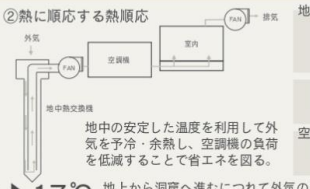
知見：
1～6lxでは時間の経過とともに正答率が上昇し、特に開始から約3分間で大きな変化がみられた。一方、0lxでは視認性の回復は限定的であった。



▶10min　完全な暗闇をつくるのではなくわずかな光を残しながら段階的に光量を絞り、暗さに身体を慣らす10分180mのシークエンスを計画する。



②熱に順応する熱順応



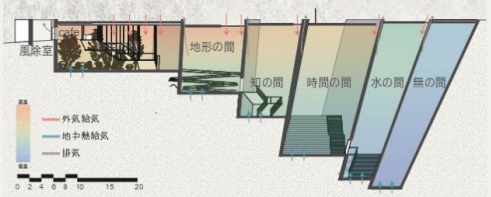
地中の安定した温度を利用して外気を予冷・余熱し、空調機の負荷を低減することで省エネを図る。

地中深くの温度
天気、気温変化の影響：小さい
夏：外気温より低い
冬：外気温より高い

夏：外気が冷される
冬：外気が温められる

空調機
処理する外気負荷が低減
→消費電力の削減

▶17℃　地上から洞窟へ進むにつれて外気の影響を抑え、年間約17℃の地中環境へ近づける。空間高さを増して上部に暖気を滞留・排出させ、温度成層によって人のいる領域を段階的に冷却する。



08 | パース　地上から洞窟へ

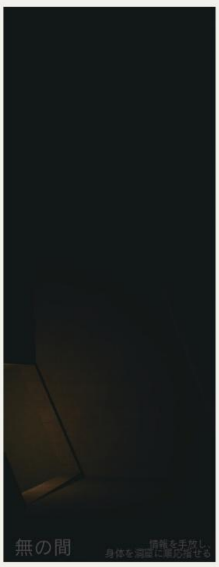












環境・設備デザイン賞「第 4 回学生のための環境デザイン設計競技」2026

「自然や宇宙と交信する建築」

作品番号：18

倉吉市本庁舎増改築計画

～暮らしよい倉吉を目指して～

関西学院大学大学院 理工学研究科 建築学専攻 1 年

立石 聡一郎

戦後モダニズム建築である倉吉市本庁舎の RC 架構を継承しながら、既存躯体の蓄熱を環境資源として再解釈する計画。中庭のアトリウム化とチムニーシステムにより立体的な自然換気・排熱経路を形成し、地域の石州瓦を用いたスクリーンによって日射を遮蔽するとともに、通風と打ち水による冷却を促す。減築と増築を通して既存建築に新たな環境性能と市民への開放性を与え、歴史的価値の継承と脱炭素化を両立する市庁舎を提案する。

倉吉市本庁舎増改築計画　暮らしよい倉吉を目指して

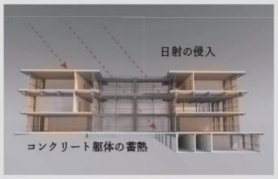
01 倉吉市本庁舎の継承と環境再生



戦後モダニズムの象徴である RC 打放しの架構と骨格を尊重しつつ、現代の市庁舎に求められる環境性能と市民への開放性を付加。既存躯体の持つ高い熱容量を再評価し、地域気候に最適化したパッシブデザインを組み込むことで、歴史的価値の継承と脱炭素社会の実現を両立させる。

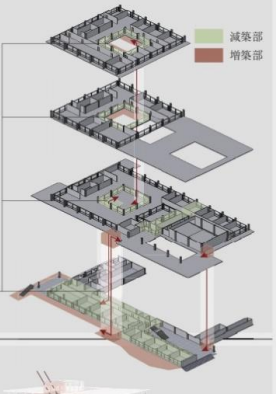
02 ブルータリズム建築の増改築

【課題】RC 躯体の蓄熱障害と室内環境



既存の RC 躯体は高い熱容量を持つが、夏期は日射熱を溜め込み、室内へ輻射熱を放出し続ける。この「蓄熱障害」が室内環境の快適性を害している。

【操作】減築・増築による環境再編



一階を一部減築しピロティ化、
中庭を内部化し、垂直動線を設ける。

03 パッシブ手法 I

【操作】チムニーシステムの構築

・吹き抜けの内部化と垂直コアによる自然換気パスの創出
・流体解析に基づく立体通風計画



中庭のアトリウム化と既存スラブの改修により、
建物中央に巨大な上昇気流の通過ルートを形成する。

【原理】チムニー効果のメカニズム



室内上下の温度差および上部開口部からの自然排熱により絶え間なく換気気流を発生させる。

【効果】夏季の換気効果 / 冬季のアトリウム効果



コンクリート躯体に蓄積された熱を排出し、冷房負荷を軽減する。

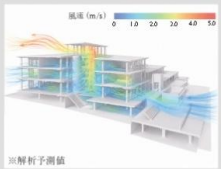


中庭のアトリウムが集熱体として機能し、暖房負荷を抑制する。

・通風（風速分布）

低層部のピロティや開口部から引き込まれた外気が、中央のアトリウムを経由して各階の執務空間へ拡散。

浮力と風圧によって吹き抜け頂部へとスムーズに通り抜ける。

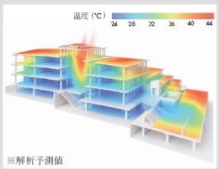


※解析予測値

・排熱（温度分布）

日射や室内発熱によって温められた空気がアトリウム上部に集約され、重力換気によって屋外へ排出される。

各階の熱滞留が解消され、室内温度が平準化される。



※解析予測値

04 パッシブ手法 II

【操作】石州瓦による環境ファサードの構築

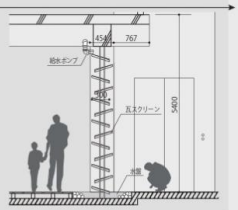
・石州瓦を再解釈した透かし積みスクリーンの配置
・日射遮蔽と風・打ち水効果のコントロール



【原理】瓦スクリーンのメカニズム

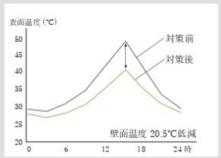


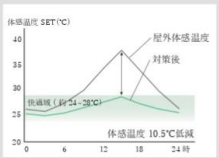
地域の石州瓦をルーバー状に配置し、直射日光を遮蔽しつつ、隙間を抜ける心地よい風と柔らかな光を取り込む。



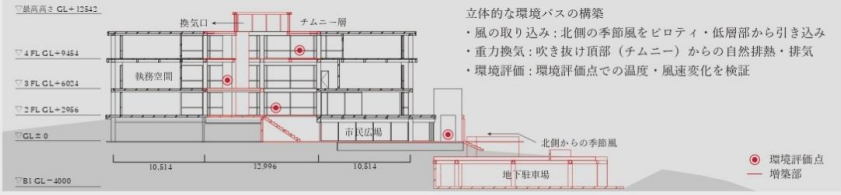
【効果】ファサードの熱特性と体感温度の評価

スクリーン設置後の室内壁面の温度比較　　体感温度の削減効果





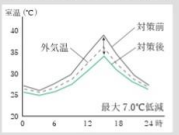
05 建築空間と一体化した環境性能評価



立体的な環境パスの構築
・風の取り込み：北側の季節風をピロティ・低層部から引き込み
・重力換気：吹き抜け頂部（チムニー）からの自然排熱・排気
・環境評価：環境評価点での温度・風速変化を検証

環境評価点
増築部

【SCENE 01】4 F 中庭上部空間 （パッシブ手法 I）

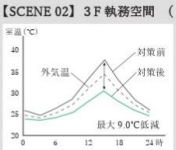




チムニー層が上昇気流を引き抜く排熱のコアとして機能する。



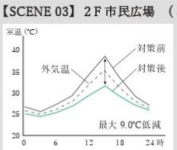
【SCENE 02】3 F 執務空間 （パッシブ手法 I）





熱のこもりを防ぎ昼夜を通して涼しい執務環境を創出する。

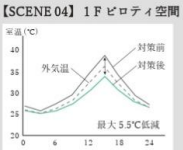
【SCENE 03】2 F 市民広場 （パッシブ手法 I）





温室効果と自然通風を制御し、市民の多様な活動や交流を包み込む。

【SCENE 04】1 F ピロティ空間 （パッシブ手法 II）





スクリーンの日射遮蔽と打ち水効果により、涼しい広場を形成する。

作品番号：19

海の子
―防潮堤が隔てる海とまちの再編―

東北大学　工学部　建築・社会環境工学科　3 年
向出　智絵

東日本大震災を経て、東北地方沿岸部には長大な防潮堤が築かれた。これにより生活の安全性が高まった一方で、生命の源である海との大きな隔たりが生じてしまった。潮の干満や波の変化が単なるデータとして処理される現代において、改めて身体レベルでその変化を感じ取り、海にふれ、知るきっかけとなる建築を提案する。人々が長い時間をかけ見つけてきた地域固有の海の性格やそこから生まれた営みを、朝市を通して受け継いでいく。

海の子 —防潮堤が隔てる海とまちの再編—



東日本大震災を経て、東北地方沿岸部には長大な防潮堤が築かれた。これにより生活の安全性が高まった一方で、生命の源である海との大きな隔たりが生じてしまった。潮の干満や波の変化が単なるデータとして処理される現代において、改めて身体レベルでその変化を感じ取り、海にふれ、知るきっかけとなる建築を提案する。人々が長い時間をかけ見つけてきた地域固有の海の性格やそこから生まれた営みを、朝市を通して受け継いでいく。

1. 敷地 —防潮堤に隔たれた、舟と魚のまちと海—

対象敷地は宮城県名取市にあるゆりあげ港朝市である。この地域は古くから海や川との繋がりが強く、釣りや水運が盛んであった。東日本大震災では大きな津波被害を受けたものの、震災のわずか16日後に復活し、その後の地域全体の復興に向けた希望の光となった。現在も毎週日曜には各地から多くの人々が集い賑わいを見せる。しかし、平成29年に築かれた防潮堤によって、海とまちは隔たれ、人々は海との直接的な関わりを失ってしまった。

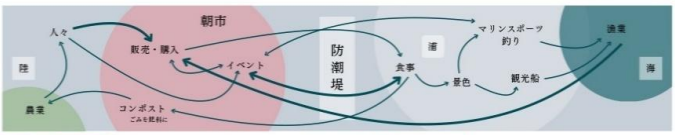




2. 問題提起 —未知が引き起こす、海と共生する文化の喪失—



3. 提案 —防潮堤を乗り越え、海とまちを強固につなぐ—



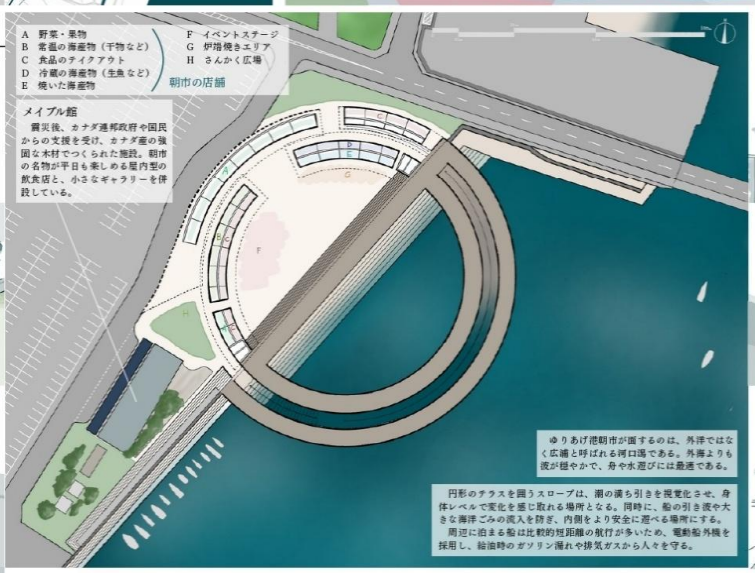
4. 計画 —活動のなかに「海」を組み込む—

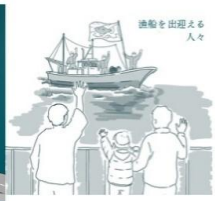
階段やスロープを用いて防潮堤を乗り越え、自然な活動の中で海と朝市を行き来し興味や知識を高める建築を提案する。われわれ人間は大昔から海で育まれた生命を頂いてきたが、分業化し効率化された現代の社会では、それらは単なる消費物に過ぎず、魚や貝のこと、その獲り方、それらが居る海のことをよく知らない。朝市は「海でとれたものを持ち寄り皆で調理して食べる」という原始的な活動と結びつく。この活動を通して人々、殊に子どもたちの海への興味・関心を引き出す。









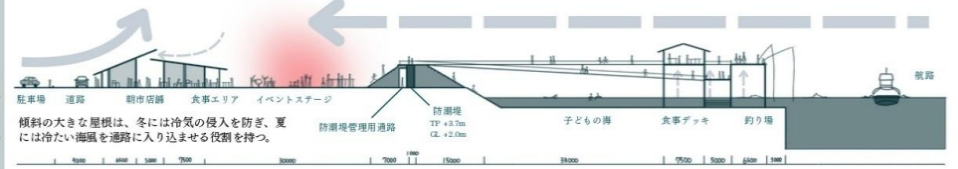






〈風の傾向〉
6～9月：海上と陸上での気温差により南東から吹く海風。2.5～3.0 m/s。
10～5月：山脈のある北西方向から吹く風。3.0～4.5 m/s。

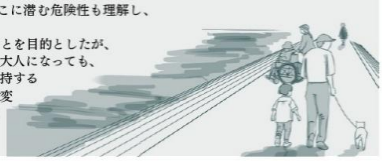
夏は海の気化熱により、比較的温度が下がる海上のデッキで食事をすることができる。さらに、その空気が海から陸に向かって運ばれ、人々が集まる場所を冷やす。冬は北西の建物が強い冷気をさえぎり、炉端焼きで温度が高くなった空気は防潮堤によってとどめられ、人々を温める。





5. 展望 —朝市の文化とともに引き継がれる建築—

自然は時に脅威であるが、多くの恵みをもたらし、それが人々をつなぐ。
海を一方的に恐れるのではなく、知ることでそこに潜む危険性も理解し、向き合っていくことが重要である。
本計画では朝市を通して海へ興味を持たせることを目的としたが、老若男女問わず居心地の良い環境にすることで、大人になっても、年をとっても、何度も訪れたいと思える建築を維持する必要がある。海のそばで潮風にさらされ管理は大変だが、ここで遊んだ子どもが成長し、朝市という文化とともに引き継いでいくことを期待する。



作品番号：20

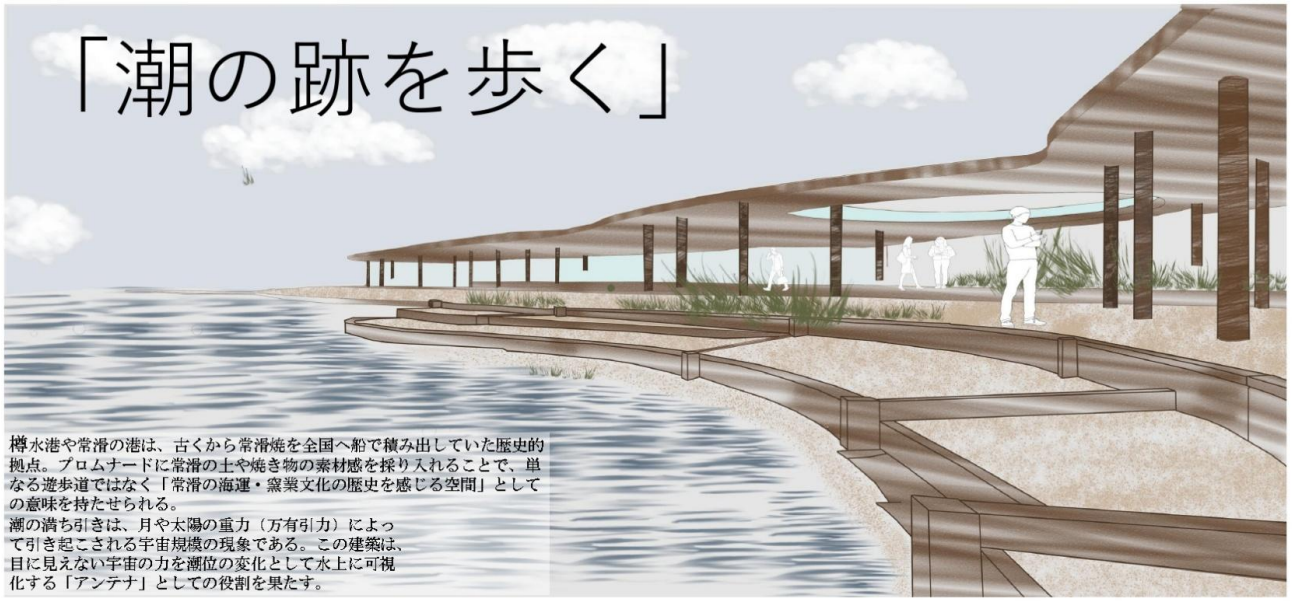
「潮の跡を歩く」

中部大学　工学部 建築学科 3 年
眞瀬　新一

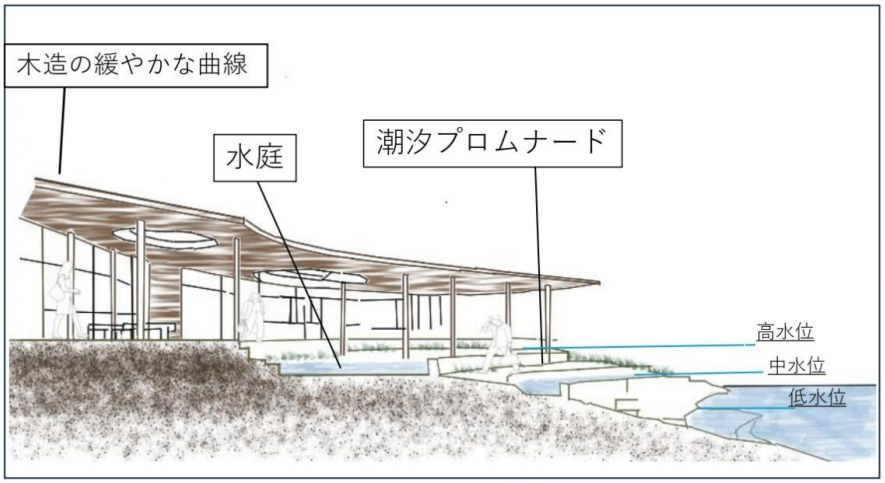
中部大学　工学部 建築学科 1 年
高木　星邑

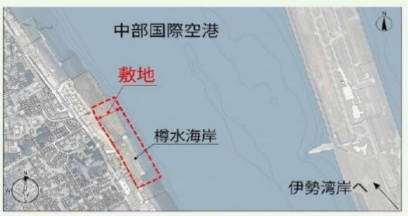
潮の満ち引きは、月や太陽の重力によって生じる宇宙規模の現象である。本計画では、常滑市樽水海岸に、潮位によって歩ける場所が変化する「潮汐プロムナード」を提案する。干潮時には海へ近づく低い道が現れ、満潮時には水に沈み、人は高いデッキへ移動する。刻々と変化する潮位を身体で感じることで、海と月、そして人をつなぎ、目に見えない宇宙の力と交信する建築を目指した。

「潮の跡を歩く」



樽水港や常滑の港は、古くから常滑焼を全国へ船で積み出していた歴史的拠点。プロムナードに常滑の土や焼き物の素材感を採り入れることで、単なる遊歩道ではなく「常滑の海運・窯業文化の歴史を感じる空間」としての意味を持たせられる。
潮の満ち引きは、月や太陽の重力（万有引力）によって引き起こされる宇宙規模の現象である。この建築は、目に見えない宇宙の力を潮位の変化として水上に可視化する「アンテナ」としての役割を果たす。





場所：常滑市樽水海岸

中部国際空港を望む浅瀬の海岸。干潮時には広い干潟が現れ、満潮時には穏やかな海が建築の足元に満ちる。昔も今も人々が潮と共に生きてきた場所。
満潮時には建築の一部が海に沈み、干潮時には広大な架構が姿を現す。地球の都合ではなく宇宙のサイクルに従って人の居場所が変化する、宇宙と調和した建築体験を生み出す。

海に浮かぶ干潟回廊

周辺の海岸は広大な浅瀬・干潟状の環境が広がり、潮の満ち引きが比較的大きいエリアである。満潮時には海に浮かぶ回廊となり、干潮時には磯や浅瀬の生態系に近づける臨場感ある歩行体験が出来る。



飛行機と夕陽が織りなす絶景

伊勢湾を臨む開けたロケーションであり、夕日(サンセット)の名所としても優れている。飛行機の離発着や対岸のシルエット、夕陽と潮の満ち引きが重なる「絶景のフォトスポット」となる。



干潟・磯の生き物観察

潮が引くことで現れるカニやハゼ、貝類、海藻などの海洋生物を間近で観察・触れ合える場所として活用できる。



一日の中で変化する風景と建築の使われ方

干潮
9:00



潮が引き、プロムナードの低い道が現れる。
海に近づき、干潮を歩くことができる。

満ちていく
12:00



水が満ちてきて、歩ける場所が変わる。
人は少し高いデッキへと移動していく。

満潮
15:00



潮が満ち、低い道は海の下。
静かな水面が建築に寄り潤う。

引き始める
18:00



潮が引き始め、また新しい潮が現れる。
一日のリズムを身体で感じる。

作品番号：21

Monochrome Choreography

神戸大学大学院 工学研究科建築学専攻 M1 年
小田 悠汰
玖村 直哉
田中 良征
松嶋 祐希

現代、太陽は紫外線や酷暑の元とされる一方、かつて人々は日向や木陰を選び、太陽とともに暮らしてきた。そこで、神戸フェリーターミナル前に、日射に応じて自律的に変形するサーモバイメタルの屋根を挿入する。金属の厚みを変化させ、温度による変形量を調整し、夏には影を、冬には光を生み出す。「光／影の路」は、通る人の動線と、待つ人の居場所を天候や時間に応じて変化させ、自然と交信する豊かな時間を生み出す。

Monochrome Choreography



課題 むやみに太陽を遮断する現代

現代における太陽は、紫外線や酷暑をもたらすものとして、遮るべき対象とされている。

しかし本来、私たちは、太陽の恵みを積極的に取り入れ、一日を豊かに暮らしてきた。晴れた日には木漏れ日の揺らめきを眺め、曇りの日には柔らかな光の中で過ごし、夏は木陰で涼み、冬は日向で団欒する。

太陽を一律に遮るのではなく、時間の移ろいや季節を感じながら、快適に過ごせる場を設計できないだろうか。

素材 日射しに呼応する素材「サーモバイメタル」

膨張率の異なる金属を貼り合わせた合金。日射量が高く蓄熱すると膨張率の違いによってメタルが変形する。一方で曇って日射量が低くなると、放熱されてメタルが元の形状に戻る。



敷地 神戸三宮フェリーターミナル前

Umie とメリケンパークを繋ぐ道で人が雑多に通るが、日除けが全くなく、夏になると非常に暑い。フェリーの待合室も光が強く入り熱環境負荷が考えられる。この敷地にサーモバイメタルの屋根を挿入することで、快適な光の環境をつくり、通る時も待つ時も光を楽しむ空間を設計する。

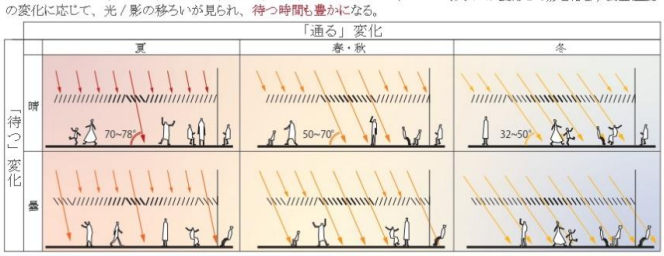


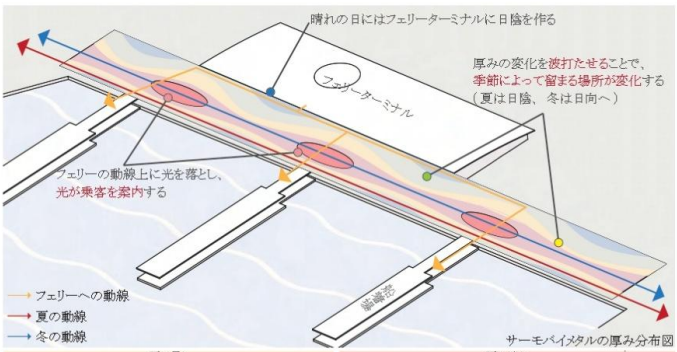
提案 メタルの厚みを変化させ、季節や天気に応じた光 / 影を振り付ける

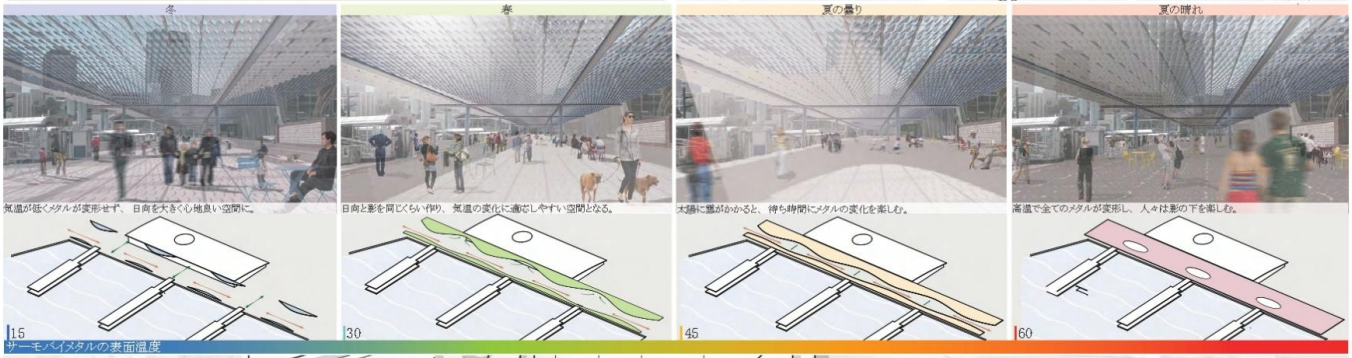
メタルの厚みを変化させることで、温度に対する反応に差をつけ、暑いほど日陰が広がり、寒いほど日向が広がる。雑多な人の通り道を、光 / 影の路にすることで、季節に応じた動線を作る。夏は影を歩き、冬は日だまりを歩く。さらに、晴れから曇りなど、時間による日射量の変化に応じて、光 / 影の移ろいが見られ、待つ時間も豊かになる。

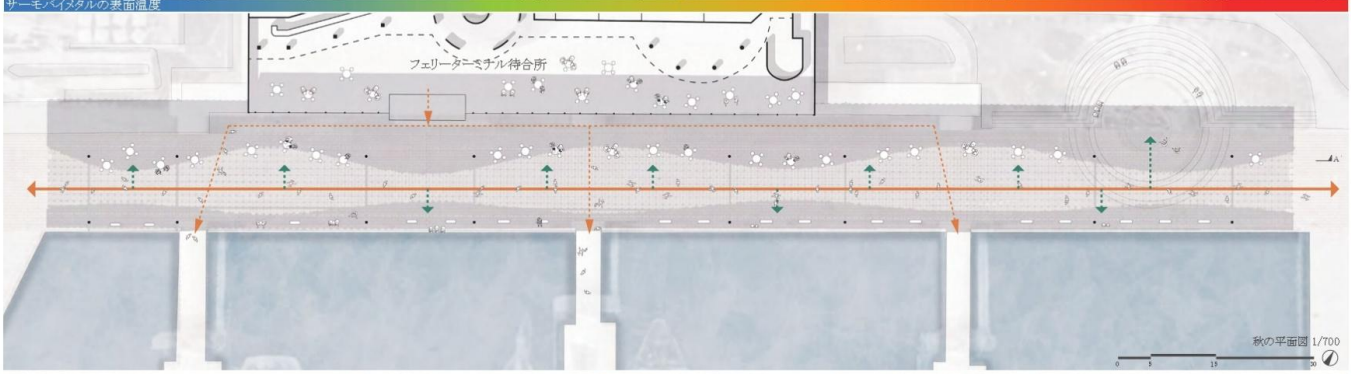


サーモバイメタルが変形して影を落とす表面温度











作品番号：24

宇宙とつながる
～七沢森林公園の星形キャンプ場～

東京工芸大学 工学部 工学科 2 年
高橋 小梅
北島 萌
市川琴子

神奈川県厚木市にある広大な七沢森林公園の一角に、周囲の植生環境を取り込んだ「多面的キャンプ場」を提案する。災害対策、斜面の利用、地上絵的ロマンを盛り込み、公園内部だけでなく、周辺地域一帯とつながるグランピングやオートキャンプ施設を計画する。太陽の軌道と風を利用し、かつての石造りの住環境を彷彿とさせる神秘的な建築は、はるか昔の光を放つ星空と呼応する。夜にはテントの灯りが銀河の星々のように森に浮かび、自然と建築が織りなす幻想的な風景を生み出す。



宇宙とつながる

～七沢森林公園の星形キャンプ場～



01自然環境と共存する

災害時、近隣の小中学校への避難をためらう人たち（障がいのある方のいる家族、ペット連れ、乳幼児の多い家庭など）が安心して避難でき情報共有や食糧支援が円滑に行えるよう、小中学校に挟まれた場所に位置している。また、周辺に大きな川がなく洪水の心配も少ないため、二次避難所としても利用可能。



02 四季を感じる平面計画

施設全体は星をかたどった形となっており、航空写真では地上絵のように見えることを狙っている。夜にはライトアップと、それぞれのテントから漏れるランプや携帯の明かりが、大きな星の形の中に銀河のような空間をつくり出すだろう。

空に浮かぶ星々の光は、何光年も前の過去から届いた光である。だからこそ、私たちがつくる小さな銀河の光が、いつか遠い未来に宇宙から観測されることを願っている。









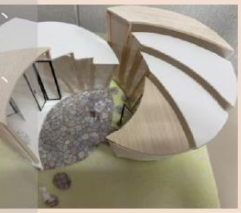


最上階のテラスでは滝に触れながら食事。



03 自然と呼吸するテント

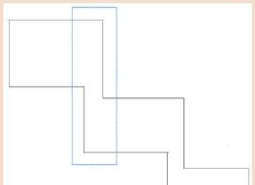
七沢森林公園の風や光、葉や花、星空から着想を得たテント。南西に向け、屋根の高さを段階的に変化させることで、夏と冬の風を取り込み、ほどよい光を生み出す。中央には家族でBBQや食事を楽しめる開けた空間を設け、外からの視線を遮りながら、自然を感じて過ごせる団欒の場とした。







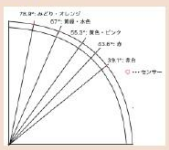
04 今日の光、夜の景色





二つの階をつなぐ吹き抜けによって上下階での空気交換を促す。





太陽高度に合わせてセンサーを５つつける。その日一番日射量を観測したセンサーの色で、夜に建物をライトアップする。また、天井に太陽光パネルを付け、滝の水の循環とライトアップの電力を賄うため、あえて蓄電はせず、その日生み出すことのできる電気だけで動かすことで天気をより視覚的に感じることができる。

元来、公園に生息する四季折々の植物たちが、テントごとの区画を隔てるように生えている。区画同士の距離を離すことで、従来よりも家族内での密接なキャンプ体験を生み出している。

作品番号：25

月奏の森

愛知工業大学　工学部建築学科　4 年
内堀優太

本作は、富士市・竹採公園に伝わるかぐや姫の物語を背景に、現代社会における「情報と記憶」の関係を再考する建築です。月や星、竹、風などの自然を五感で感じることで、その場で得た体験を自身の記憶として残します。その記憶が後に他者へ共有され、新たな興味や再訪を生み出すことで、情報と記憶が循環し続ける場を提案します。

月奏の森

── 記憶をめぐる建築 ──

月を見上げる。
それは、
きっと
はじめての
情報に出会う
瞬間。



コンセプト

今、ここでしか見えない ものを、見にいく。

この建築は、富士市・竹採公園に伝わる
かぐや姫の物語を背景に、現代の情報社会における
「情報と記憶」の関係を再考する建築です。
月や星、竹、風などの自然を五感で感じることで、
その場で得た体験を自身の記憶として残します。
そして、体験を記憶として持ち帰り、
その記憶が後に他者へ共有され、新たな興味や再訪を
生み出すことで、
情報と記憶が循環し続ける場を提案します。
また、記憶を曖昧にし、時間の経過とともに
その価値をより深く感じられるような体験を目指します。

情報の循環

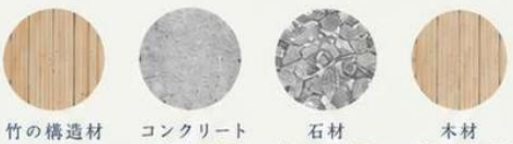


建築のイメージ



竹林に溶け込む
シンプルな構成。
自然の中に浮かぶような
軽やかな屋根が、
人を迎え入れる。

使用する建材





竹の柱と屋根の隙間から
光や風が入り、
自然を感じられる
空間をつくる。

体験のシーン



建築が伝える：情報の循環



建築が生み出す情報

この場所での体験は、
ただの観光ではなく、記憶として持ち帰られ、
そして誰かに伝わることで、
また新たな人を惹きつける。
そうして、情報と記憶は循環し続ける。

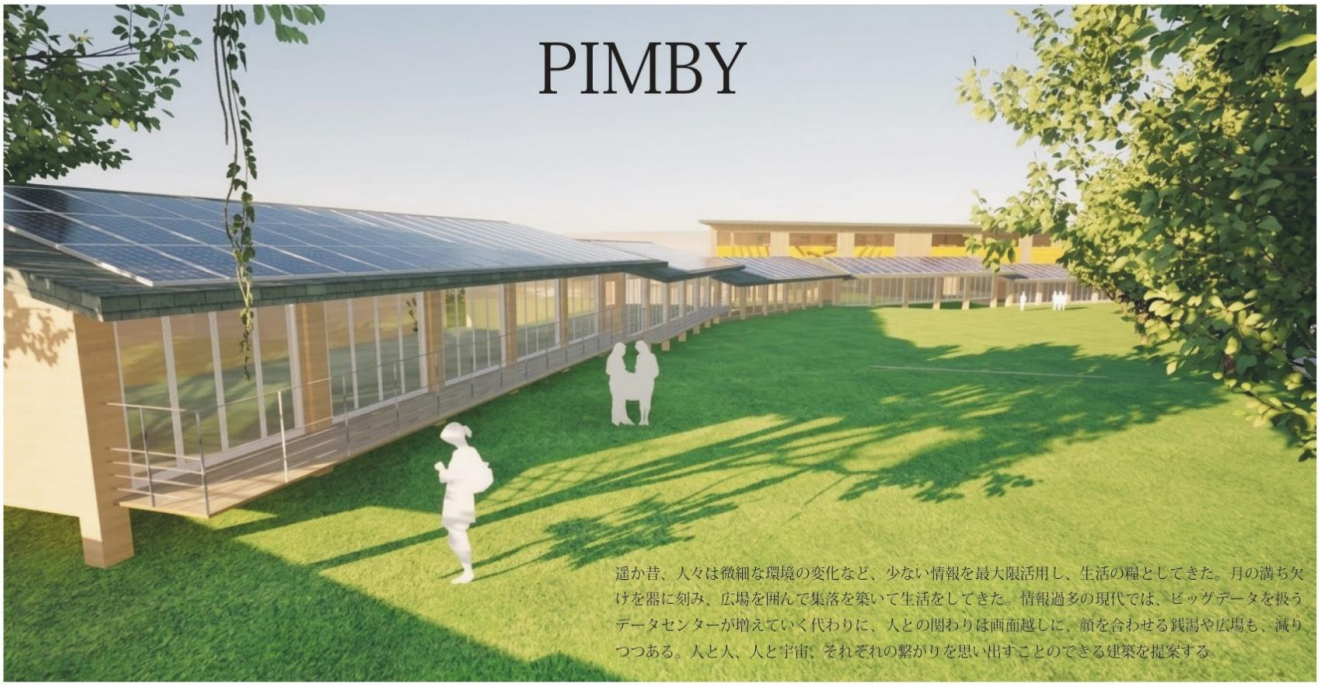
作品番号：26

PIMBY

東京都市大学 建築都市デザイン学部 建築学科 4 年
澤井 悠季
山王 徹人
滝 康太郎
宮本 葵生

はるか昔、人々は空から情報を得ていた。石を並べ、器に刻み、広場を囲んで暮らしていた。周囲を見渡し、宇宙を見上げる。身体そのものが、情報を受け取るアンテナだった。機械が世界を受信する現代で、NIMBY の可能性を抱えるデータセンターが、その演算の熱で、人々がもう一度アンテナとしての身体を取り戻す場所をつくる。データセンターを、「うちの裏に、どうぞ。」そう言える隣人に昇華させる。

PIMBY



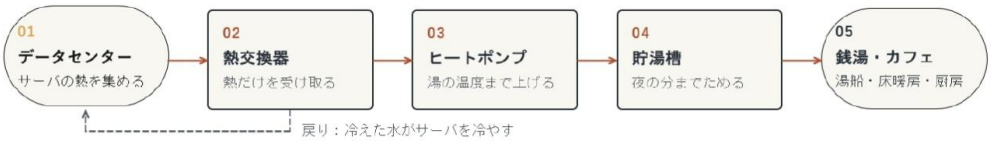
遥か昔、人々は微細な環境の変化など、少ない情報を最大限活用し、生活の糧としてきた。月の満ち欠けを器に刻み、広場を囲んで集落を築いて生活をしてきた。情報過多の現代では、ビッグデータを扱うデータセンターが増えていく代わりに、人との関わりは画面越しに、顔を合わせる銭湯や広場も、減りつつある。人と人、人と宇宙、それぞれの繋がりを思い出すことのできる建築を提案する。

問い

近年、生成 AI の普及やクラウドサービスの拡大により、世界中でデータ処理や保存の需要が高まっている。それに伴い、データセンターの建設が増加している。しかし、電気と水を大量に消費しながら、その土地の人々に直接豊かな生活をもたらすものでないこの眠らない大きな箱は、「NIMBY」としてゴミ処理場や火葬場と同じ列に並びつつある。

概要

敷地は横浜市都筑区の住宅街。データセンターは緑道公園を挟んで 100m 以内に存在する。人々の住処に場違い的に存在するデータセンターの排熱を利用し、住民憩いの場としてのたまり場を計画する。



広場を抱く 5 棟の屋根

丸みを帯びながら連なる 5 つの屋根は、それぞれ地面からの高さや日射の受け方が異なり、室内に入る光にも違いが生まれる。
中でも銭湯側の 1 棟 (右図赤色部) は、軒を深く伸ばし屋根勾配を 4 寸程度とすることで、夏は日射を遮り、冬は取り込む設計とした。光環境解析の結果より、室内の照度は夏に 500 ルクス程度と窓際でも過剰になりにくく、冬には 5000 ルクス程度まで日射が入り、暖房負荷の軽減が見込まれる。
また、計画敷地は周囲が開けており日射を得やすいことから、5 棟すべての屋根に太陽光パネルを載せる。屋根は棟ごとに高さが異なるため、パネルは隣り合う棟の影がかからない位置に割り付けた。発電した電力は、銭湯やカフェの照明や冷暖房に利用する。
さらに、データセンターの排熱を床暖房や給湯の熱源として活用する。自然の光と人工の熱が、室内の快適さを穏やかに整えていく。



銭湯から空を見上げる
—スマートフォンを置いて空に身を預ける—



緑道を抜けて銭湯へ
—木々に囲まれた小道を通り銭湯へ入る—



住宅街から広場へ向かう
—連なる軒先に導かれ、開けた空の下へ—

世代が見守り合う広場

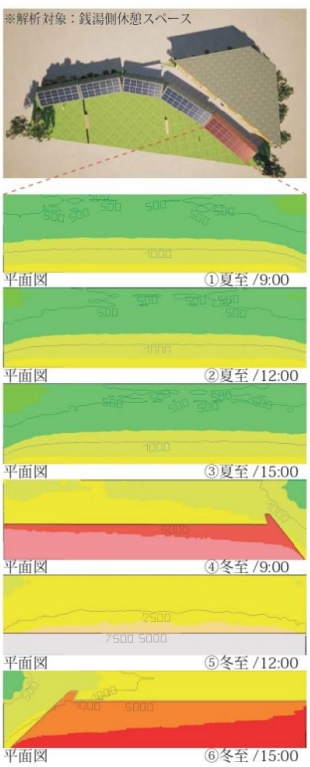
5 棟には、銭湯側から、休憩スペース (2 棟)、学童スペース、図書館、コワーキングスペースを配置した。
銭湯に近い棟ほどくつろぎの場となり、離れるにつれて学びや仕事の場へと、ゆるやかに性格が移り変わっていく。計画地付近は小学校もあり、放課後の子どもたちが過ごす学童、本を介して世代が交わる図書館、在宅ワークの人々が集うコワーキングスペースを設けることで、地域の暮らしのニーズに応える。すべての棟が広場に面しているため、休憩スペースでくつろぐ高齢者が広場で遊ぶ子どもたちを見守り、仕事の合間に親が子どもの様子をうかがうことができる。また、銭湯の下階にはカフェを設け、昼夜を問わず人が立ち寄れるたまり場とした。子育て世帯も高齢世帯も、ここを日々の拠点として安心して暮らせる場所を目指す。



information

address：神奈川県横浜市都筑区

- 近くにデータセンター（青印）
- 土地の周辺は比較的低層の戸建てが多く住宅街の中に存在する
- 北から南へ登りの傾斜がある



作品番号：27

風あい
～潮風と時間で育む居場所～

神戸大学大学院　工学研究科　建築学専攻　修士 1 年
青野倫奈
岡本幹大
田中愛梨

自然は絶えず変化し続ける一方、現代建築はその変化を抑え、完成時の姿を維持しようとする傾向がある。そこで、自然の変化によって形成された串本町を敷地とし、銅板の緑青化や苔の成長、風や匂いなど、異なる時間スケールの自然現象を受け入れることで、人と自然がともに時間を重ねるシェアリングスポットを提案する。

風あい　- 潮風と時間で育む居場所 -



Site　和歌山県串本町

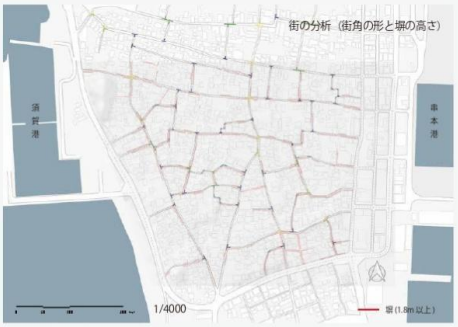
敷地は、和歌山県串本町の密集市街地である。
串本町は、砂州の堆積によって形成された土地の上に成立しており、町そのものが自然の変化の積み重ねによって生まれている。
一方で、市街地は細く複雑に入り組んだ街区で構成され、高い塀や建物の密集によって、風は街区の外周に留まり、中心部まで届きにくい。
自然の作用によって生まれた町でありながら、その内部は潮風から切り離されつつある。

Large Long ⟷ Scale ⟷ Small Short


自生する苔


金属屋根や壁のサビ


五感で感じる風



Program

提案するのは、潮風を街区内部へ導き、自然の変化を受け止めるための
分散型の居場所である。
各拠点は、街路形態に応じて塀や建築と一体的に計画され、
風を感じながら立ち止まり、過ごすことのできる半屋外空間や小さな滞留空間をつくる。
また、その中心には、人が日常的に集まり、休み、交流できる拠点を設ける。
風とともに変化する空間の中で、人と自然の新たな関係を育むことを目指す。



Design

本提案では、街区を 5 つのパターンに分類し、それぞれの形態に応じて、風を街区中心部まで導く空間操作を行う。
塀・植栽・建築を用いて、風を受け、導き、濾しながら、街区の奥へ自然の変化を届ける。

風の街への誘い込み　街角の分類　—5 タイプ—



風は、湿度や塩分を運び、銅板の緑青化や苔の生育など、時間の中で現れる変化をもたらす。
銅板の変色や苔の生育を取り入れることで、目に見えない風の作用を可視化し、時間とともに育つ街並みをつくる。

風による変化の利用

塩分による変化


自生する苔

水分による変化


サビ

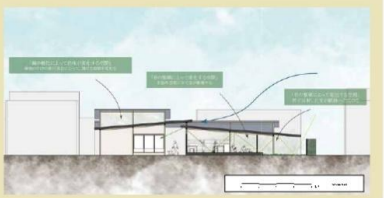
くの字路

地域の高齢者が、苔に包まれた薄暗く落ち着いた空間で、
酒をとりながらうたた寝をしたり、お茶を飲みながら世間話をしたりして、
ゆっくりと時間を過ごす、かつての老人憩いの家の新しい形である。
苔の色や厚みが移ろう様子が、そこに集う人々の時間の積み重ねと重なり合う。


銅が光を反射し、また時間や天候によって表情を変え、明るくにぎやかな気配をつくりだす



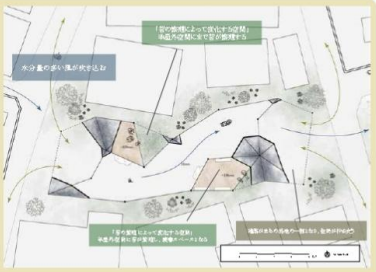

苔が光を吸収し湿度を保ち、静かで落ち着いた気配をつくりだす



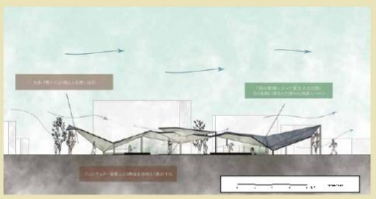
T字路

地域住民が日常的に、読書や勉強のために一人で静かに過ごしたり、
囲碁や将棋を囲み、2人と語らったりする。
また、読まなくなった本や使わなくなった道具を持ち寄り、
誰かがそれを手に取っていく、ひとつのシェアリングスポットである。

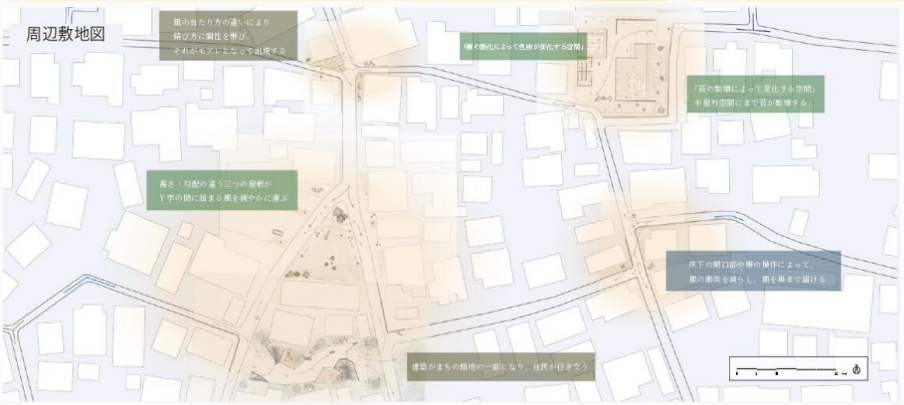

風と人を開いた屋根が迎え入れる




苔の空間と本のための空間が屋根によってゆるやかに分節されている



周辺敷地図




Y字路


十字路


乙の字路

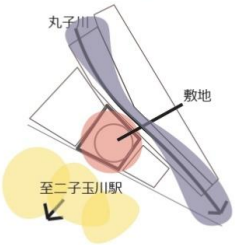
作品番号：28

暗闇を覗く
-うち/内/家から広がる宇宙-

東京理科大学 工学部 建築学科 3 年

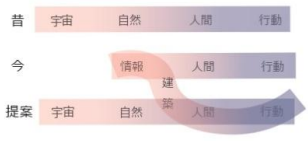
南に道路、北には丸子川。東西には家が並び、朝夕の低い光を遮る。一方で夜の街は光に満ち、暗くならなければ咲かないアサガオはつぼみを閉ざしたままだ。光は遮られ、夜は明るすぎる。この敷地は、光にも暗さにも恵まれていないようである。ではこの場所で光と暗さを取り戻すことはできるのか。建築を挟み上下それぞれにおいて宇宙・自然との交流を誘発することで、3 つの時間軸の変化を”待ち”ながら送る夏の住まいを提案する。

01 まぶしい都市の中で



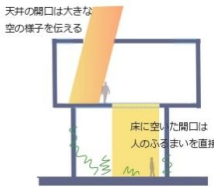
東京は光に溢れている。南に街路、北に丸子川が流れるこの敷地も例外ではない。一方で東西には２階建ての家が並び、朝夕の低い光を遮っている。夜の街は光で満たされ、暗くならなければ咲かないアサガオに必要な暗さが足りない。光は遮られ夜は明るすぎる。この敷地は光にも暗さにも恵まれていないように見える。この場所で光と暗さを取り戻すことはできるのか。

02 予測ではなく待つ暮らしを



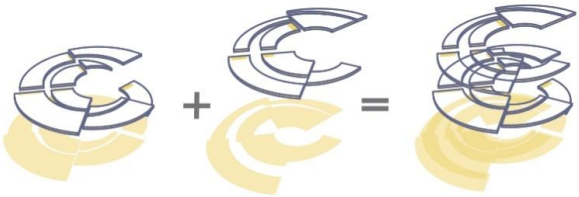
本来人は宇宙と自然を介した情報を観察することで、生きるための行動を起こしていた。しかし現代都市部では天気予報を始めとした情報技術が発展したことで自然を予測し、スマートフォンを見て行動することが当たり前になってきた。昨今の分厚い壁を有する建築も自然の情報を遮るという意味では情報技術と同義である。
本提案では開花まで暗闇の中で待ち続けるアサガオを用いることで３種類の時間の流れを同時に存在させ、建築を自然の変化を”待つ”空間へと捉え直す。

03 建築を大気層に組み込む



建築を高床にする事で、地上のアサガオと天空の月や太陽に挟まれたフィルターへと変容する。屋根の開口は天空を受け取り、床の開口は人の暮らしを地上へ手渡す。蔓は地面から屋根まで這い、上下の自然と建築を一続きにつなぐ。人はここで、自然を受け取ることも、自然に与えることもできる。

04 ライトスケープ

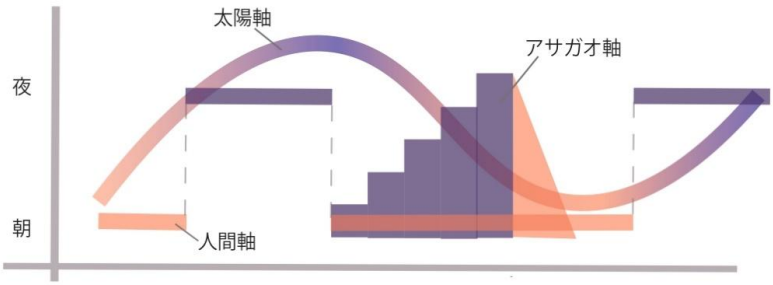


床と天井にそれぞれ異なる開口を設ける。床の開口は地面と最も離れる最上階を最大幅とする。一方で天井の開口は光の入りにくい下層階を最大幅とする。これが重なることで一日の中に様々な光環境が現れる。

-うち/内/家 暗闇 から広がる宇宙- 見えない



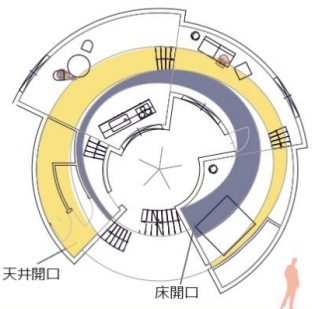




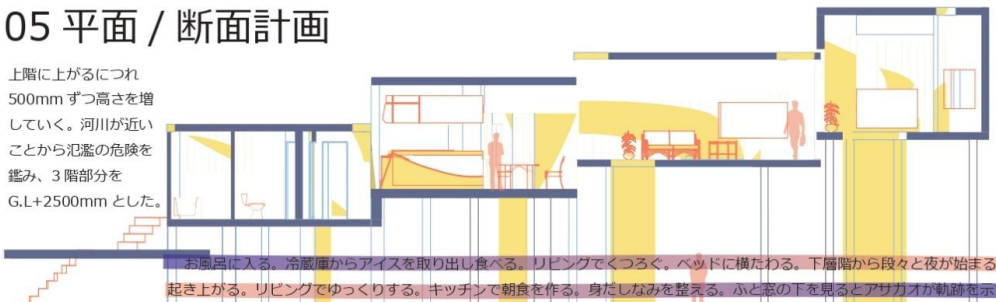
05 時間を受け取り、手渡す

月の示す夜は滑らかで曲線的な絶対力を持つ。
人の暮らしに灯る夜は照明により明確に切り替わる。
アサガオの夜はそんな人の夜を受けて積み重なる。
この３つの時間軸のズレを観察することで、この家に時間が生まれる。昼の長さは一年で最大 14 時間 35 分、最小 9 時間 45 分、その差は約 5 時間。アサガオの夜の半分でもある 5 時間を基準に、屋根の開口は朝は寝室と、昼はリビング、夕方はキッチンへと光を導き、時計でなく光の巡りで一日を測る。

05 平面 / 断面計画



上階に上がるにつれ 500mm ずつ高さを増していく。河川が近いことから氾濫の危険を鑑み、３階部分を G.L+2500mm とした。



お風呂に入る。冷蔵庫からアイスを取り出し食べる。リビングでくつろぐ。ベッドに横たわる。下層階から段々と夜が始まる。
起き上がる。リビングでゆっくりする。キッチンで朝食を作る。身だしなみを整える。ふと窓の下を見るとアサガオが軌跡を示す。

作品番号：30

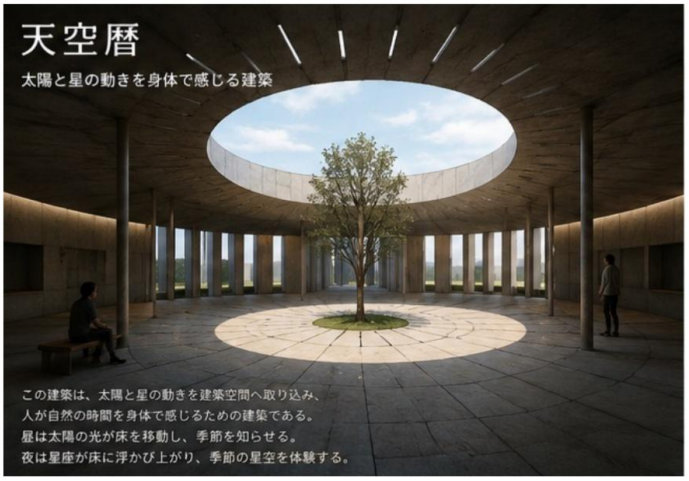
天空暦
太陽と星の動きを身体で感じる

国士館大学 理工学部 理工学科 3 年
保本　野乃葉

太陽と星の動きを建築空間に取り込み、自然そのものを「暦」として感じる建築を提案するものである。建物は中央に空へ開かれた天空広場を設け、その周囲を回廊が囲む構成とする。昼は屋根のスリットから差し込む太陽光が床を移動し、季節の変化を示す。夜は星空を見上げ、星座の移り変わりを体験する。利用者は建築を歩きながら、一日の時間や一年の季節、宇宙の動きを身体的に感じることができる。

天空暦

太陽と星の動きを身体で感じる建築



この建築は、太陽と星の動きを建築空間へ取り込み、
人が自然の時間を身体で感じるための建築である。
昼は太陽の光が床を移動し、季節を知らせる。
夜は星座が床に浮かび上がり、季節の星空を体験する。

空間体験の流れ



東から朝日が差し込み、一日の始まりを告げる。

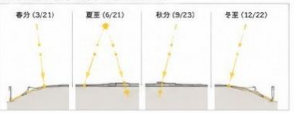
太陽の光が床を移動し、時間と季節を知らせる。

西に移る光が夕暮れを演出し、一日の終わりを感じる。

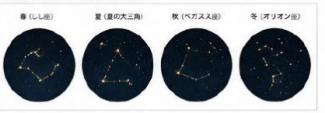
屋根の小さな開口から星が見え、星座が床に浮かび上がる。

中央の吹き抜けから天頂の空を見上げ、宇宙を感じる。

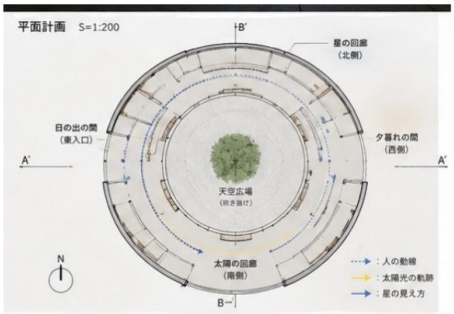
太陽の動きと光の軌跡（南側回廊の床）



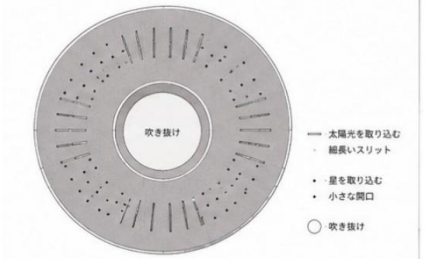
星座の移り変わり（北側回廊の床）



平面計画 S=1:200



屋根伏図 S=1:200



断面図 A-A' S=1:200（東西断面）



断面図 B-B' S=1:200（南北断面）



外観イメージ（昼）



外観イメージ（夜）



夜の回廊イメージ



素材イメージ



ディテールイメージ（光のスリット）

